

マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読む

ワークショップ成果報告集

東京外国語大学
総合文化研究所

この成果報告集について

本報告集は、東京外国語大学総合文化研究所主催ワークショップとして開催された「マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読むー多面体としての文学ー」（2022年6月25日）の成果報告である。発話者が当日の発表原稿に基づいて加筆修正したものを掲載している。

ワークショップ：文学の移動／移動の文学

マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読む
～多面体としての文学～

このワークショップは、『ケルト人の夢』読書会の成果を共有するために開かれるものです。
大学院生や学部生の発表と、それに対するゲストの先生方のリプライを中心に構成されます。

特別ゲスト：
野谷文昭（東京大学名誉教授）
星野智幸（作家）

講師：
近藤宏（神奈川大学人間科学部准教授）

司会：久野量一（東京外国語大学）

発話者：
上玉利茉佑（東京外国語大学大学院）
栗原佑紀子（東京大学大学院）
藤井健太郎（東京大学大学院）
松本健（東京外国語大学修士修了生）
村上梨緒（東京外国語大学言語文化学部）
奥村文音（東京外国語大学大学院）
新谷和輝（東京外国語大学大学院）

日時：2022年6月25日（土曜日）
時間：午後2時から5時
場所：東京外国語大学管理棟中会議室
参加方法：対面は学内者優先で事前登録制
オンライン（ウェビナー）参加はQRコード（上）より登録
※対面希望の場合、QRコード（下）で参加登録をお願いします。
感染対策のため定員20名。学内者を優先する場合があります。

主催：総合文化研究所 連絡先：rkuno@tufs.ac.jp



目次

ロジャーの夢／眠り、ケースメントの真実、先住民の記憶	
近藤宏	4
『ケルト人の夢』における二人の作家―「書き」「書かれる」ケースメント―	
栗原佑紀子	19
見果てぬ夢を追い求める	
松本健	28
フィクションと現実の狭間でみる「夢」――「全体小説」としての『ケルト人の夢』とマリオ・バルガス＝リョサ――	
藤井健太郎	44
バルガス＝リョサとソ連・ロシア	
奥村文音	48
ロジャー・ケースメントの再生――映像・舞台作品の視点から	
新谷和輝	57

はじめに

『ケルト人の夢』は、ペントンヴィル刑務所の独房に捕らえられた主人公のロジャー・ケースメントのもとに弁護士が訪れるシーンから始まる。恩赦にむけて働きかけていた弁護士は、囚われのロジャーに状況が大きく悪化したことを告げる。世論が変わったきっかけは、彼が残した日記にあった、と。以降物語では、奇数章において独房にいるロジャーのことが語られる。彼のもとを訪れる友人、彼を見張るシェリフとの会話、あるいは囚われのロジャー自身の回想によって、読者はロジャーがアイルランドとどのようにかわり、逮捕されるに至ったのかを知ることになる。過去を振り返る奇数章の物語は、獄中のロジャーが過ごす時間に沿うように進み、囚われのロジャーを待ち構える運命が先取りされることはない。

これに対して、偶数章では、ロジャーがアイルランド・ナショナリストとなり逮捕されるまでの人生の歩みが語られる。コンゴ、アマゾン、イギリス、アイルランドなど地球のさまざまな場所でロジャーが経験し、思考し、夢想したことを、読者は部分的に先取りしながら知りゆくことになる。例えば、ロジャーのコンゴでの経験が語られるパートは、ロジャーが1902年にマラリアの3度目の発作に襲われているところから始まる。ロジャーは病床でまどろみながら、1884年の旅路をはじめとするそれまでのコンゴでの経験を思い出すのである。回想形式で記された第IV章は、次の一文によって幕を上げる。「イギリス領事ロジャー・ケースメントのコンゴ川遡行の旅は、一九〇三年六月五日に始まり、彼のその後の人生を変えることになるが、本来は前年に開始されるはずだった」(SC: 28) ¹。この1903年の旅の様子は、次の偶数章である第VI章で記される。このように偶数章の語り手は、ロジャーを待ち構える命運を自らが知っていることを隠さずに、事の顛末を既に知っている〈伝記作家〉として、獄中の外のロジャーの物語を語る。

こうしたコントラストとともに織りなされる『ケルト人の夢』の物語は、最後の奇数章 XV でロジャーの首にロープが巻かれるまでの様子が語られたあとに続く、エピローグによって閉じられる。このエピローグは、読者に唐突な印象を残す。というのも、「ロジャー・ケースメントの物語は彼の死後、現れては消え、また現れる」(SC: 503) という一文からはじまるこの最終章では、獄中のケースメントの運命を決定的に変えた日記『ブラック・ダイアリー』の事実／虚構性をめぐる考察など、それまでの物語世界に対するメタ的議論が展開されるためである。ロジャー・ケースメントの物語ではなく、彼の物語を語ることそのものが語られるという再帰的考察において、著者のバルガス＝リョサは、自身の手による物語もまたロジャー・ケースメントをめぐる物語の一バリエーションであると認めているのだ。それでは、『ケルト人の夢』はロジャー・ケースメントを通じた、いかなる物語なのだろうか。

タイトルである「ケルト人の夢」は、1906年にロジャー・ケースメントが記した「アイルランドの神話的過去についての長い叙事詩」のタイトルでもあることが、偶数章の語り手によって明かされている (SC: 154)。その後、その物語では、「ケルト人の夢」という表現がアイルランド独立を指すことばとして用いられるようになる (SC: 298 ほか)。「ケルト人の夢」がアイルランド独立のことでもあるなら、『ケルト人の夢』は頓挫することが予め分かっている夢についての物語として語られていることになる。ロジャーは、武装蜂起からの独立という夢を思い描き、独軍の捕虜となったアイルランド系イギリス人からなる旅団を組織し、共にイギリスを敵視するドイツ軍と協力したその旅団の武装蜂起によって、独立を勝ち取るという戦略を実

行に移そうとした。こうしたロジャーのビジョンとその頓挫は物語が進むにつれ明かされるが、その構想が失敗に終わったことは、物語の始まりにおいてすでにロジャーが獄中に捕らえられているという舞台設定に明示されている。

武装蜂起の夢と現実

頓挫したことが予め知られている「ケルト人の夢」は、武装蜂起によって実現されるはずだった。その方法は、道徳的な問いをロジャーに投げかけ彼を揺さぶるものでもあった。偶数章の物語が進むと、アイルランド人の武装蜂起が近づき現実味を帯びてゆく。やがて武力格差による失敗、さらには若者たちの犠牲的な死までもが予見される段階になる。するとロジャーは、若者たちに約束された死に揺さぶられ、こう問わずにはいられなくなる。「経験も洞察力もかけている人々を、ただ模範を示すだけのために殺戮の場へと行くとは知らない若者たちを駆り立てる権利が彼らにはあるのでしょうか」(SC: 489)。

この疑いは自らが描いた「ケルト人の夢」を放棄するようロジャーを導き、彼は武装蜂起を止めようと行動する。だが、そうするや否やロジャーは捕らえられてしまう。それゆえ、奇数章の物語の主人公である獄中のロジャーは、武装蜂起の顛末を知らない。自らの抱いた夢の顛末を人づてに知ることになった囚人ロジャーは、伝え聞く現実を受け止められずにいるような顔を見せる。たとえば、獄中に訪れた友人のアリスが、イースター蜂起に参加した人びとに対する警察の弾圧をほのめかしたことがあった。それに対するロジャーの反応を、語り手は次のように記している。「激しい弾圧が続くのだろうか？ロジャーは努めて、銃殺や死者のことを、その悲劇的な週の余波を考えまいとしていた」(SC: 67)。あるいは別の日に、アリスは一週間というつかの間のアイルランド共和国の独立とそのあいだの混乱の様子を語った。それに耳を傾けたロジャーは、独房に連れ戻された後も、「彼女の記憶と証言によってペントンヴィル刑務所からつれだされ、耳をつんざくような大音響に包まれた市街戦の真っ只中に放り出されたようになった」(SC: 405)。そのままロジャーはアイルランド・ナショナリストの武装蜂起に思いを巡らし、自らの計画が構想通りに進んだ可能性をベッドの上で夢想する。

アウド号が運んでくるドイツ製の武器が、四月二〇日の夜にトラリー湾で義勇軍の手に届いていたら、どうなっていたか？彼は何百人もの愛国者たちが自転車や自動車、荷車、ラバ、ロバに乗り、星空の下を移動して、その武器と弾薬をアイルランドの津々浦々に配って回るところを想像した。蜂起した人びとの手にある二万丁のライフル銃と一〇丁の機関銃、五〇〇万発の弾薬で事態を変えられただろうか？(SC: 407)

ドイツ軍との協力を取り付け、武器調達することは、ロジャーのミッションだった。しかし、ロジャーはそれに失敗する。さらにその事実を仲間に直接伝えることはできずに投獄された。ならば、こうした可能性に思いを巡らすことは、自身に落ち度はなかったかを問うという自らの身を裂くような反省的回顧に転じてもよさそうなものであるⁱⁱ。しかし、獄中のロジャーはそんな問いには苛まされなかった。眠気が彼を襲ったからである。上の引用の後、物語はこう続く。「幸い、彼はあくびが出たことに気づいた。眠ればそうしたイメージは消え去り、不快な気持ちも次第に治るだろう。彼は眠りの世界に沈んでいく気がした。彼は快い夢をみた」(SC: 408)。幸運にも、空想や心理状態に邪魔されずに訪れた眠りによって、独房のロジャーは「ケルト人の夢」が現実となったがゆえに生じるさまざまな問いに直面せずにいることができるのだ。

『ケルト人の夢』では、そんなロジャーが「ケルト人の夢」を夢みるようになる決定的なき

っかけとなったのが、南米アマゾンのプトゥマヨにおけるゴム採集経済体制下の先住民の奴隷的労働に対する調査であるように描かれている。植民地主義的暴力が生む現実が、ロジャーを夢見るように導いているかのようなのである。このように『ケルト人の夢』は、ロジャー・ケースメントの人生の歩みを夢と現実を往来しながら進むように描く物語としとして読むこともできる。

しかしながら、二〇世紀初頭に植民地主義的暴力と向き合ったロジャー・ケースメントの人生を、現実と夢を揺れ動く歩みを基調に今日改めて語り直す『ケルト人の夢』は、それでよいのだろうか、という当惑にも似た疑問を読者に抱かせるところがある。とりわけ、コンゴ、アマゾン、アイルランドの三部から構成される『ケルト人の夢』のなかで最も分量が割かれているアマゾン・パートに現れる先住民のイメージが、そうだ。このパートでロジャーは、二〇世紀のアマゾン地域におけるゴムブームを支える労働力として強制的に徴用された先住民の実態を知る。彼らのうちにロジャーが認めるのは、「混乱と恐怖によって麻痺した自動人形」や「木偶」という姿である。ケースメントによる写真の資料的活用を分析したサ・カルバーリョ（2018）は、ケースメントは写真に映しだされた傷に目を開く力という点で、調査に同行した撮影技師よりも優れた力を発揮していた（Sá Carvalho 2018: 378-380）。『ケルト人の夢』の主人公ロジャーは、傷つく者をよく見たうえで、もはや自らの意志では動きえない者の姿を認めていたとでもいうのだろうか。後に見るように「ケルト人の夢」は、そのような認識枠組と不可分な仕方で見られた夢でもある。だからこそ、はたしてそれでよいのだろうか、と考えずにはいられないのだ。

この疑問を出発点に本稿では、ロジャー・ケースメントを通じたこの物語の枠組を浮かび上がらせ、その外に出る経路を示すというかたちで、『ケルト人の夢』を考える。そこで、多くの面では重なるであろう『ケルト人の夢』の主人公であるロジャー・ケースメントと歴史的人物であるロジャー・ケースメントを、あえて分離させてみたい。前者の人物造形と認識枠組を探りながら、後者が記したプトゥマヨの真実をめぐる報告書『ブルー・ブック』や彼が裁判で証拠として提出したアマゾン調査旅行時の日記ⁱⁱⁱ（*the Amazonian Journal of Roger Casement*）にも目を向け、両者のズレを浮かび上がらせる。こうした手続きを踏まえ、『ケルト人の夢』という物語におけるアマゾンを認識する枠組を対象化したい。そのために『ケルト人の夢』の主人公のロジャー・ケースメントをロジャー、『ブルー・ブック』などの著者をケースメントと呼び分けることにしよう。ケースメントを通じてロジャーを対象化することによって、ロジャーの物語からプトゥマヨの別の現実には踏み出す経路が見出せるようになる。

夢とアマゾン

『ケルト人の夢』においてロジャーが「ケルト人の夢」を抱く契機は、ロジャーら調査委員会がプトゥマヨの森にある「ゴム農園」を訪れる第 X 章において記されている。それは調査一団がゴムブームの経済の生む現実を目の当たりにした後、アマゾン流域の都市イギトスへと戻る船旅のさなかのことだった。その船旅のあいだ、ロジャーは疲労と不安に苛まれ、「悪夢ばかり見てあまり眠れない」日々を送っていた。その不安の理由のひとつがアイルランドのことだった。

果敢な行動、一斉蜂起によってのみ、ウィット族やボラ族などプトゥマヨの惨めな人びとのように植民地化によって祖国が《魂を失う》のを阻むことができるという確信に至ったのだが、それ以来、彼は祖国のために、何世紀もつづく奴隷状態を終わらせる反乱を準備するこ

とに完全に没頭したくてうずうずしていた (SC: 285)。

ここでは、プトゥマヨの先住民とアイルランド人が、その「人種」的差異にも拘わらず^{iv}、似たような境遇にある民として重ねられている。アイルランド人による武装蜂起という夢は、調査で目の当たりにしたプトゥマヨの先住民のような現実が到来することを防ぐ方法として、着想されたのだ。ここにあるように、プトゥマヨとアイルランドの民は、すっかりと一致しているわけではない。アイルランド人にはプトゥマヨの先住民のようにはない余地が残されている。二つの民は同じく植地的な支配下にあるが、「惨めな」プトゥマヨの先住民には、その支配体制から生じた、どん詰まりのような現実が見出されていた。プトゥマヨの先住民を植民地主義の暴力によって徹底的に蹂躪されたがゆえに反抗することがほぼ不可能な民というのが、ロジャーの見立てである。プトゥマヨの先住民はアイルランド人と植民地支配を被る点で似ているが、そうであるがゆえに、反抗の可能性という点において差異が浮かびあがる。それがロジャーの認識枠組である。

そうした差異の前提となる両者の類似性を着想するようになった様子が、彼の記した「日記」からの引用というかたちで提示されている。調査委員会によるプトゥマヨ調査が本格化し、収奪的ゴム経済を回すために凄惨な暴力を受けてきた先住民たちを目の当たりにし、暴力の様子の聞き取りを重ねていた日々^vに記されたものだった。

ロジャー・ケースメントは日記に、イキトスに上陸して以来、頭の中で次第に具体的になりつつあるアイディアを書き留めた。《プトゥマヨの先住民が、自分たちが追い込まれた悲惨な状況から抜け出すための唯一の方法は、武装蜂起することだと完全に確信するに至ったということである。(略) この社会では、国家は収奪し絶滅させる機械の分ちがたい一部となっているのだ。先住民はそんな社会制度を消して待ち望んではならない。自由になりたいければ、自分たちの手と勇気で自由を勝ち取らなければならないのだ。ボラ族の首長カテレネのように。ただし彼のように感傷的な理由で自らを犠牲にしてはならない。最後まで戦い続けるのだ》。日記に書きつけたこの文章のことを考えながら、小道をふさいでいる葛や茂み、木の幹や枝を山刀で払って道を切り開き、順調なペースで進む一方、ある日の午後、こんなことを考えついた。《我々アイルランド人は、プトゥマヨのウィット族やボラ族、アンドケ族、ムイナネ族みたいなものだ。もしも自由を得るために、法律制度やイギリス政府を信用し続けるなら、植民地化され、搾取され、常にその状態であり続けることを宣告されている。自由は決して与えられないだろう。与えざるを得なくなる抗し難い圧力を感じない限り、我々を植民地化している帝国が我々に自由を与えることがあるだろうか？その圧力は武器からしか生まれない》(SC: 265-266)。

この段階では、武装蜂起はプトゥマヨの先住民にも可能なこととされている。しかも、不完全ではあるかもしれないが武装蜂起の実例を、先住民自身に見出している。では、いかにしてプトゥマヨの先住民による武装蜂起の不可能性という現実、プトゥマヨの先住民とアイルランドの民を分かつものを見出したのだろうか。この問いへの回答となる時系列に沿った思考の発展のようなものを、この〈伝記作家〉による物語に見つけることはできない。というのも〈伝記作家〉は、プトゥマヨに到着したその日にすでに、現状に対する抵抗が不可能な人びとという先住民像をロジャーが抱いていたと物語るからである。その日、ロジャーたちはバルバドス人数人の証言を聞くことができた。そして夕食の席で、調査委員会のひとりである植物学者の

ウォルター・フォークは、なぜプトゥマヨの先住民が反乱を起こさなかったのか、と問う。ロジャーは応じる。「そんなに単純ではない」。続けて〈伝記作家〉はロジャーの考えをまとめている。

アフリカでコンゴの先住民が蜂起しなかったのと同じ理由だ。限定された場所で起きている、個人か少数グループの自殺行為は例外でしかない。搾取の制度が極まると、肉体以前に精神を破壊してしまうからだ。彼らが犠牲になっている暴力は、抵抗する意欲、生きながらえさせる本能を失わせ、先住民を混乱と恐怖によって麻痺した自動人形に変えてしまう。多くの者は、自分たちに起きたことが、具体的な特定の人間の悪がもたらした結果であることが理解できず、神話的災難、神々の呪い、逃げ道のない罰だと思ってしまうのだ (SC: 244)。

〈プトゥマヨの先住民に蜂起は不可能である〉という現実、コンゴでの経験からロジャーが既に知っていた現実を下図にしている。こうした現実の理解と不可分な先住民像が、自動人形となった先住民というイメージである。そのような先住民像は、現実と夢を往来する運動としてのロジャーの人生の物語において浮かび上がる。ロジャーにとってコンゴでの調査とは、文明化の夢から植民地主義の現実へと目覚めるきっかけであり、プトゥマヨでの調査は、植民地主義の現実を再認することで「ケルト人の夢」へと目覚める契機なのだから。こうした現実と夢の往来の運動が行き着くところを先取りするかのようにして、ロジャーはプトゥマヨに到着したその日にはもう、〈プトゥマヨの先住民には蜂起は不可能である〉という現実を予感していたのである。そしてその下図にたがわない先住民の姿を、プトゥマヨの森に見出していくことになる。

そんなロジャーだからか、目の前のプトゥマヨの先住民よりもアイルランド人に気が向いてしまう。たとえば、マタンサスに滞在中、「アイルランドのことを思うと胸が苦しくなり、ロジャーは夜、何度も目を覚ました」(SC: 267)。ゴムを運ぶ先住民とともに徒歩で密林を抜けてたどり着いた先のエントレリオスに滞在しているときには、「来る日も、来る週も、来る月も、執拗に立ち返」(SC: 274) ることになる以下のようなアイディアを日記に書き留めた。

我々は、アイルランド人の精神が、アマゾンの先住民のように、植民地化によってくじかれるのを許してはならない。手遅れになってわれわれが木偶にならないうちに、今、一気に行動しなければならない (SC: 274)。

夢見る未来を目の前の現実よりも重視するロジャー、あるいは、事の顛末へと足早に歩を進める物語の主人公の姿は、プトゥマヨでの調査を終え、その成果を『ブルー・ブック』として刊行するまでの歩みが物語られるなかでも描かれる。アマゾン・パートを締めくくる偶数章 XII の内容は、おおむね、以下のようにまとめられる。

プトゥマヨでの調査を終えたロジャーはロンドンに戻り、1911 年 3 月に報告書をいったん書き終える。ただその公刊の是非を判断するために、プトゥマヨの状況に改善がみられているかどうかを確かめるという使命を帯びて、再びアマゾンに戻る。しかし、安全上の懸念からプトゥマヨにはたどり着けなかった。ロジャーはイキトスで、ペルー・アマゾン・カンパニー関係者の刑事責任を追及するため新たに赴任した判事が既に行方不明になっていたことを知る。集められた証言には変革の力がないことにする、そんな諸力のはたらく社会が植民地都市イキト

スには広がっていたのである。ロジャーはそのイキトスからロンドンへと戻り、『プトゥマヨ・レポート』を『ブルー・ブック』として刊行する。その後、ペルー・アマゾン・カンパニーの残虐行為の真偽を関係者の証言から確かめる特別委員が組織され、ロジャー、そしてプトゥマヨのゴム経済の支配者であるアラナも公聴会で証言する。委員会はアラナの責任を認め報告書を刊行すると、その影響や、国際的なゴムブームの生産地がアジアへと移ってゆく影響が重なり、アラナの帝国も崩れ落ち、イキトスは没落する^v。しかしそのとき、ロジャーは「アマゾンとプトゥマヨの事をすでに忘れ始めていた。アイルランドの問題がふたたび彼の第一の気がかりとなった」(SC: 372)。

アマゾンをめぐる物語に幕を下ろされようとするとき、それはすでに忘れられ始めている。〈伝記作家〉はその顛末を先取りしながら、ロジャーにとってのプトゥマヨの現実を物語っていたのではないか。その現実は「ケルト人の夢」に予め上塗りされていたのだ、と。

カテネレによる反乱

ケルト人の夢を先取りしながらプトゥマヨの現実が見出されるとき認識枠組は、一度ならず耳にした先住民の抵抗という現実を「例外」や「自殺行為」として浮かび上がらせている。その「例外」のひとつ、「ボラ族」の首長カテネレによる抵抗に対するロジャーの考えを〈伝記作家〉は次のようにまとめる。

物語〔カテネレによる抵抗についてのナラティブ〕は現実離れした終わりを迎えるものだ、とロジャーは考える、たぶんこの暑い土地に一般的な残酷趣味に合うように変えられたのだろう。だが少なくとも、そこには象徴と典型的パターンが見られる。一人の先住民が反抗し、罰として拷問され、英雄として死ぬのだ (SC: 245)。

ロジャーが語り継がれるカテネレの抵抗に見出すのは、その人物の生というよりもその生を物語にする形式である、ということだ。これに対して、ケースメントがプトゥマヨ滞在中に記した日記『ホワイト・ダイアリー』を編纂したアンガスは、ロジャーがカテネレに寄せていた心的態度を〈伝記作家〉とは異なるものとして受け止めている。アンガスによれば、「カテネレこそがケースメントがもっともシンパシーを抱き自らを重ねた先住民だった」(AJ: 441 note 180)^{vi}。実際ケースメントは、プトゥマヨを離れイキトゥスにむけて出発した11月16日の日記に、その日に起きた皆既月食の様子を記した後、調査の旅を締めくくるかのような一節を書き残している。

わたしは早く床に就いたが、眩い月明かりで2時30分に目が覚めた。木々は静謐のなかで後方に流れゆき、ヤシの葉の陰がとさかのように、淡く青い夜空に浮かびあがる。わたしはその空を眺め、あの哀れなインディアン諸部族の運命を思った。彼らは、この地獄のごろつきどもによって辱しめられながら捕らえられ、奴隷にされ、この美しい地で殺されていったのだ。わたしはカテネレのこと、ボラの勇敢な首長のことを、この森で殺されていった全てのインディアンのことを思った (AJ: 339)。

ここにあるようにケースメントは、カテネレの生をプトゥマヨ先住民の「例外」と位置づけ、彼による抵抗に物語の形式を見るというロジャーの視座とは対照的なそれに立っていた。ケースメントは、カテネレを介してプトゥマヨの先住民を想起するほどに、カテネレの生に魅せら

れていた。カテネレの反乱という出来事をめぐり、ロジャーとケースメントのあいだには大きな食い違いが浮かび上がる。

『ケルト人の夢』でロジャーは、カテネレの反乱を次のように振り返る（SC: 245）^{vii}。カテネレは、「ある夜、部族の小さなグループの助けを借りて」ゴム商人たちの猟銃を奪い、かつて酔っ払った勢いで自分の妻をレイプしたゴム商人を殺害し、逃げる。その後、彼は追われる身となる。妻が捕らえられ、人目につくように、拷問にかけられる。そこにカテネレは姿を見せ、抵抗を諦め、残忍に殺される。ただしこうした出来事の叙述に対し、ロジャーは先に見たように、「残酷趣味」や「象徴と典型的パターン」を見ることで満足し、カテネレのような生き方は「例外」とされる。

それではケースメントはどうか。彼はプトゥマヨの真実を報告するために記した文章『ブルー・ブック』において、〈伝記作家〉によるのとは異なる仕方で、カテネレによる抵抗を記述している（BB: 108-110）^{viii}。そこには、『ケルト人の夢』と同じく、彼の妻に向けられた暴力のことも記されているが、細部において見逃せない違いがある。

カテネレはいちど捕らわれの身となり、その眼前で妻がレイプされた。そこでカテネレは「誰も見ていないときに足枷の重し木を外してくれた、ある若いインディオの女性に助けられ」（BB: 109）逃亡に成功する。そのときに逃亡するだけでなく、数丁の猟銃を持ち出した。そして「その猟銃によって自らの氏族の男たちを武装し、白人と白人を助け彼らのために働くインディオたちに対しておおっぴらに戦いを仕掛けていったのである」。さらに、カテネレの妻をレイプした白人を含め、複数の白人を殺害した。そのため、今度は、カテネレたちが追われるようになった。白人たちはカテネレを誘き寄せるために、彼の妻を捕らえることに成功する。そしてカテネレは姿を見せ、捕らえられ処刑される。

ケースメントはロジャーとは異なり、カテネレが殺される様子の残忍さを彼自信の報告には記していない。だがロジャーの記していないことをケースメントは記している。すなわち、カテネレはまず逃亡者であったこと、そして彼の反乱は個人的になされたものというよりも奪取した武力による組織的行動であった、ということだ。ケースメントのこの理解は、プトゥマヨの真実を詳らかにするために集められた証言に由来する。『ブルー・ブック』に記録された証言者の一人ジェームス・チェイスは、カテネレの殺害をめぐる証言のなかで以下の出来事を述べている（BB: 156-158）。

〔カテネレを追跡する〕追跡隊は〔カテネレがゴム商人の白人を殺害した現場である〕モレイアを出発し、最初に到着した森にあるインディオの「家」で八人のインディオ、五人の男と三人の女を捕まえた。彼らの手は背中側で縛られ、無理やり歩かせられた。彼らがついた次の家では、四人のインディオ、一人の女と三人の男が捕らえられた。責任者だったバスケスは、その女の頭を切り落とすよう、ムチャチョス〔ゴム農園での汚れ仕事を担った先住民の若者の総称〕の一人に命じた。そうする必然性は何もなく、チェイスによれば「責任者であり、望むことができるから」だった。（略）

〔追跡隊は〕カテネレが住んでいると考えられた家に近づいていった。彼は、ゴム労働からの逃亡者たちが探し求めるインディオたちの首長だった。バスケスは、チェイスとオカンボと数人のムチョチョスにそこに留まるよう命じ、彼自身は追跡隊とともにさらなる追跡を進めることにした。戻ってくると、バスケスはカテネレの家までたどり着いた、と言った。カテネレと彼の妻、あるいは妻の一人が家にいた。二人だけだった。バスケスは妻を捕まえたが、カテネレには逃げられた。バスケスはそこに留まり、四人のムチャチョスに別の家に

行き、カテネレが所持していたライフルを持って来るよう命じた。ムチャチョスがその家に着くと、四丁のライフルと数人のインディオが見つかり、彼らを捕まえた。このインディオたちの手を背中側で縛ったが、しばらくすると、ムチャチョスのリーダー、「エンリケ」と呼ばれていたボラのインディオが彼ら〔の縄〕をほどくように命じた。残りの三人のムチャチョスにはほかの家にインディオを探しに行くように命じると、彼〔エンリケ〕は縄をほどかれたばかりの男たちと一緒にいた。このインディオたちが、エンリケと残りのムチャチョスと同じように、ボラであると気づいたからである (BB: 156)。

カテネレは、ゴム労働から逃亡した先住民たちの行き先でもあった。また、ムチャチョスを含め、さまざまな立場の先住民は逃亡を助けようとすることもあった (ムチャチョスの場合はまれにせよ)。『ブルー・ブック』に記述されたプトゥマヨの真実において、プトゥマヨの先住民たちは、ロジャーの言うような、「恐怖によって麻痺した自動人形」や「木偶」としてのみあるわけではない。カテネレの反乱やそれに結びつくさまざまな事実は、その実例である。しかしロジャーは、カテネレさえも自殺願望のある例外でしかなく、ほかの事柄は背景にならない、そのような枠組をもってプトゥマヨの現実を把握していたのである。

ロジャーが忘れたケースメントの真実

カテネレの反乱をめぐる記述にあきらかなように、〈伝記作家〉の描くロジャーは、『ブルー・ブック』の著者ケースメントが記すことのいくつかを現実とは受け止めていない。ロジャーの眼にプトゥマヨの先住民が「恐怖によって麻痺した自動人形」や「木偶」として浮かび上がるのも、事の顛末としてのプトゥマヨの忘却が先取りされ、ロジャーの人物像に織り込まれているからではないだろうか。ロジャーは、プトゥマヨの現実の一部を忘ればじめているかのように、ケースメントの真実を考慮に入れなくなっているのである。

カテネレの反乱が組織的活動でもあったことのほかに、ロジャーはどんなことを考慮せずにいるだろうか。例えば〈伝記作家〉は、ロジャーの調査の制約を記している。「あれこれ試みたにもかかわらず、ロジャーはどのインディオからも生の証言を得ることができなかった」(SC:264)、と。ロジャー・ケースメントの調査隊には先住民言語を知るとされるバルバトス人、フレデリック・ビショップが通訳として同行していた。だが、先住民言語を用いたやり取りがうまくいかなかったようである (SC: 246, 260)。

確かに『ブルー・ブック』では、個人名とともに証言内容が詳述されるバルバトス人証言者として扱われている先住民は一人としていない。だが、プトゥマヨの森で起きていたことをケースメントらに伝える先住民がいたという事実は、そこに書き込まれている。ケースメントは調査を進めるなかで、懲罰としての暴力の証拠として先住民の身体に残る鞭打ちの傷跡を確認していた (この様子は『ケルト人の夢』にもある)。だが、ケースメントらの到来に合わせて、調査委員会の眼を欺くために、身体に痕跡を残さない新たな懲罰―拷問の技術が採用されるようになっていた。水責めという方法である。『ブルー・ブック』には、人目を欺かんとする新たな技術が同時進行的に採用されたという事実とともに、いかに調査委員会がその事実を知りえたのか書かれている。

恐怖を引き起こしながらもその被害者の身体に後を残さないために、というのも、オキシデンテはラ・チョレーラのそばにあり、ティソン氏による監査というかたちの訪問先になりえたからである。1910年10月にわたしが訪れたときのオキシデンテの責任者であったベラルデは、

彼を満足させるだけのゴムを採集してこなかったインディオを罰するための新たな方法を考案していた。背中で腕を縛り上げ、川に連れていき、気絶し溺れ始めるまで、力づくで水面下にとどめるといったものだ。

ティソン氏と会社の委員会と共にオクシデンテに滞在しているあいだに、二人の先住民の輪番のリーダー（現地では、カピタンと呼ばれている）が夜中、わたしの通訳に近づき、この新たな手法について、そして最近一人のインディオがほぼ溺れかけたのかについて、情報提供をした。またその少し前には、二人のインディオがこの方法によって溺死したと証言した。委員会とティソン氏に対するこの証言はわたしの注意を引き、この二人のインディオから事情聴取し、この訴えの事実確認をする方策を取るように、彼らに依頼した（BB: 96）。

ケースメントの調査では、先住民を証言者とするような条件が十分には整えられていなかったかもしれない。だがそのような条件があるからこそ、隠された暴力形態が制約を越えて伝わるという事実には、いっそうの重みがあるのではないだろうか。少なくともその先住民たちの姿は、事実を明るみに出さんとする情報提供者のイメージにも重なるものである。ケースメントが注意を向けた「自動人形」からはみ出る現実に対して目を閉ざす人物としてロジャーの人物像が構成されている、ということだ。

そのほかにも、「自動人形」には収斂しない先住民のふるまいが『ブルー・ブック』には書き込まれている。そのひとつが、逃亡である（BB: 107, 112）。ケースメントは個別の逃亡の事例に言及することも、一般的な仕方ですべてを詳述することもない。しかし、逃亡を試みて捕まえられた者にこそ過酷な罰が下されやすいこと、逃亡者に対しては執拗な追跡がなされることなど、先住民による逃亡がたびたびあったことがうかがえる内容は繰り返し記される。そのなかでも、バルバトス人たちによって語られたことを基にした次の記述は注目に値する。それが伝えるのは、逃亡する先住民の姿だけでなく、暴力に屈従していなかった先住民の姿である。

例えば、この報告書の付録にある証言録においても、逃亡した者の行き先を暴露しなければ拷問が課されるという恐ろしい強迫にもかかわらず、インディオたちが逃亡者の隠れ場所の暴露を拒むのは一度だけではない。ノーマン〔最も劣悪なゴム商人の一人〕は、捕らえられ尋問された首長の手や足を切りながら、彼に口を割らせようとしたことがあったが、その首長は既に逃げおおせた者の避難先を暴露するよりもそのように苦しんで死ぬ方を選んだのだった。こうしたタイプの事例についてはいくつも情報が提供されるので、白人に向けられる非難の正しさとインディオの強さについて、わたしはいっさいの疑いを抱いていない（BB:112）。

ケースメントは、暴力に晒されるその瞬間においてなお屈することのない先住民の姿に「強さ」を認めている。この「強さ」は、先住民を「武装蜂起」に導きはしなかったかもしれない。しかしその「強さ」はほかの先住民の逃亡を可能にすることによって、逃亡者を執拗に追跡し罰するというゴム経済体制の暴力を、たとえつかの間であれ、止めるものだった。

ケースメントはプトゥマヨの先住民について記した文章（1912）で、本来的に従順で支配されやすいことをプトゥマヨの先住民の一般的性格として挙げている。これは、当時の人種主義的社会類型論の一例ともみなすことができる偏見だろう。だが同時に、この先住民像には収まらない力を先住民のうちに認めてもいる。バルバトス人の証言にはケースメントの偏見を打ち砕く力があつた、あるいは、ケースメントはそうにプトゥマヨの真実を受け止めていた。

ケースメントは、プトゥマヨでの経験を通じて、自らの偏見の外にある現実を目を開くことができたのである。対してロジャーは、ケースメントのそのような側面を失念したかのような人物として、物語に登場する。彼にとってのアマゾン、知らずに進み始めた忘却と共に見出されているかのようなのだ。

プトゥマヨ先住民の記憶

忘れっぽい男。〈伝記作家〉が語るプトゥマヨのロジャーは、こう性格付けられる。こうした印象は、アマゾン・パートの終わりで語られる、ロジャーによるプトゥマヨのその後をめぐる幻視的ビジョンによって、いっそう強まっている。ロジャーが幻視するその後のプトゥマヨとは、暴力的なゴム経済の痕跡が、時間の経過によって灌木や蔓が回復し再び動物たちが戻ることと消し去りうるような場所である。森の回復－記憶の消去というそのビジョンにおいて、先住民たちはそれ以前に舞台から退場している（SC: 377）。

この空想は奇妙なものだ。暴力を伴う経済は、地理的空間のみに痕跡を残すのだろうか。暴力は人間の精神にも身体にも、深い痕跡を残すのではないか。ロジャーも、そのことを認識しているからこそ、先住民たちの反乱不可能性を思考しえたはずである。そうだとすれば、プトゥマヨのその後において、森のどこかで暴力の余波と共に生きるサバイバーとしての先住民に思いを巡らす余地もありそうだ。しかしながらロジャーの思い描くその後のプトゥマヨに、暴力の記憶を抱える先住民は不在である。彼は、自分自身の考えさえ忘れてしまっているかのようである。暴力の余波を生きるサバイバーという人物像に目を向けるポスト・コンフリクト的な感性がはたらかないそのビジョンでは、むしろ、暴力の痕跡そのものが自然と消えてゆく。忘れてしまうのだ。

はたして、それでよいのだろうか。現代のプトゥマヨ先住民におけるゴムブーム期の記憶をめぐる論文において、人類学者のエcheverriはいみじくも次のように記している。「先住民でない者や白人たちは、結局、この地域を去ることになった。だが、殺した者と殺された者の氏族や親族は、先延ばしにされた復讐に結び付く記憶とともに、ここに留まっている」（Echeverri 2010: 54）。プトゥマヨの先住民は、ロジャーが考えたくもないし考えることもできない暴力の余波を、生きているのである。

プトゥマヨの先住民諸集団のひとつ、ムイナネの人びとはゴムブームのあいだに大幅に人口を減らし、アラナが所有していたとされる一帯から離れたカクタ川流域で暮らしていた。ゴムブームが到来するまでは、ムイナネの祖先たちが魚や石などを取りには来るものの、日常的に暮らす場所ではなかった。彼らの神話では、カクタ川流域は悪の力を備えた神話的存在の地帯なのである。先祖たちが暮らしていたのは、ゴムブームの舞台となったプトゥマヨ川流域だった。一九八〇年代にコロンビア政府がかつてアラナの所有していた地域をプトゥマヨの諸先住民の領土として公的に認めた。すでにゴムブームを直接体験した世代は生き残っておらず、年長者たちはゴムブーム以降に生まれたが、親世代から、ゴムブーム期に何が起きたのかという記憶語りを聞かされていた。そして一九九三年、ムイナネの人びとは、先祖たちの生の記憶が刻銘されると同時にゴムブームがもたらした多くの死に憑かれた場所である、プトゥマヨ流域へと戻ることに決めた。それが、多くの親族／近隣集団を結ぶ儀礼的交換の舞台となる伝統的家屋、マロカを再建するのに必要でもあったからである。儀礼的交換は、ムイナネのみならず、ボラやウィットなど別の先住民集団との社交性や親族的つながりを生む機会なのだが、ゴムブーム以降、その機会を持てずにいたムイナネは人口を著しく減らしていた。

エcheverriによれば、現代のムイナネの人びとを含むプトゥマヨの先住民にとって、ゴムブ

ーム期の歴史的記憶は「闇の編み籠（el Canasto de las tinieblas）」に封じ込められるべきものとされている。「闇の編み籠」は、異民族間のつながりを生む儀礼的交換において唱えられる言説ラフエ——タバコやコカのことばと言われることもある——と対照をなすような、それぞれの民族、氏族のあいだで保持されるべき機密となる物語の記憶装置である。先住民間の戦争や暴力的衝突、妖術の記憶などは「忘れられないが、機密にされるべき」（Echeverri 2010: 56）ものだとされている。ゴムブーム期の記憶が機密事項となるのも、その暴力が先住民同士の社会関係をも傷つけていたからにほかならない。「先住民諸集団、集団内の氏族や家系には、ゴム商人との同盟によって、別集団や従来の〔先住民内部の〕敵に対する戦争を仕掛ける者もいた。さらには、いくつかの集団の若者たちはほかの集団を襲撃し、最悪の犯罪の実行者としてふるまうように、育てられ訓練された〔ムチャチョのこと〕。この先住民間戦争の激化には、白人の先住民に対する暴力よりも長期間持続し、深く傷を残す効果があった」（Echeverri 2010: 54）^{ix}。実際に、例えばカテネレも、ゴム経済を取り仕切る白人たちだけでなく、彼らに協力する先住民たちを攻撃対象にしていた。それは「ゴム商人との同盟」による戦争に抗する方法でもあったのだろう。いずれにせよプトゥマヨの先住民にとって、ゴムブームの記憶とは、自分の家族・親族のなかで誰が殺されたのか、自分の家族・親族のなかで誰が殺していたのか、という問いと不可分であるがために、今日の社会関係にも影を落としているのだ。

エチェベリは、ムイナネの人びとが祖先の地に帰還するにあたり実施した事前調査の様子を記している。ゴムブームの時代を生きた親を持つ世代とその子の世代からなる一団である。彼らはマタンサスに到着すると、ゴムブーム時代に用いられていた家屋や日用品の残骸や「殺害した人びとを焼却するためにゴム商人たちが用いていた大きな穴を二つ」見つけた。記憶語りによって、彼らは人を投げ捨て焼いた穴があったことを知っていたという。「それらの穴では植生が回復しておらず、はっきりと確認できた」（Echeverri 2010: 53）。先住民の青年がその様子を書き記したメモを、エチェベリは引用している。

私たちは、カカオの木の丘〔マタンサスのこと〕と呼ばれる場所に着いた。入江を見て、スケッチを描き、ロングハウスがかつて建っていた丘に沿って歩いた。それは、美しいが恐ろしくもあった。古びたポットを見つけ、それを詳しく観察した後、再び丘に沿って歩きだし、ゴミ捨て場〔過去の遺物が集中的に見つけられた場所〕に着いた。地面を掻いてみると、銃の弾がいくつか見つかった。丘を進むと、死者が焼かれた穴が見つかった。それは、わたしには実に恐ろしく感じられた。その後、私たちは引き返し始めた。

（Echeverri 2010: 54）

また一団の年長者チュチョの大叔父である故人ジェエバデエカは、ゴムブーム期にマタンサスに暮らしていた。そこで非道なゴム商人として悪名高いノーマンドの手にかかり殺され、「耳のピアスから吊るされた」人物だった。一団は、その呪われた場所から徒歩で数時間離れたところで、夜を明かすことになった。その晩、チュチョは他ならぬ故人のジェエバデエカに向けて、次のように語りかけたという。

私たちは、苦難の場所に到着しました。ユカ川、カカオの丘〔マタンサスのこと〕に到着しました。あなたの孫が到着したのです。私たちは別人に思われるかもしれませんが、よそ者ではありません。怒らないでください、落ち着いてください。ここにいる若者たちは、あなたの孫なのです。あなたを手にかけた者について、何が起きたのかにつ

いて、私たちは何も知りません。それはあなたが存じ上げていることです。私たちは新たな世代の者です。ここにいるのはわたしの後に生まれた者で、わたしが彼らの連れてきたのです。この若者たちを癒すために、私たちはやってきました。私たちは、ここで起きたことは知りません。もし知っているのなら、そのことをあなたにお話しするでしょう。ここにいるのは、私たちの指導者ジェエバデエカさんです。あなたはここでお亡くなりになりました。わたしはあなたの孫をお見せするために、ここに來たのです。兄弟と共に彼らを連れて來たのです。私たちはよそ者ではありません。私たちは自らを癒すためにここに來たのです。そのことをお伝えしたいのです。(Echeverri 2010: 52)

翌日、一団はその殺害があった場所に着いた。そこでもチュチョは故人ジェエバデエカに向けて、自分たちの身元を明らかにするように、そして、良い未来を開くための助力を求めて、語りかけたのだった。

ジェエバデエカさん、ここにあなたは暮らしていたし、今もいます。私たちはあなたの孫で、今ここに着きました。ここまでたどり着き、ここに立っています。あなたもいますよね？(中略)私たちは、あなたのもとにある良い言葉を求めてやってきました。生の言葉、平静な言葉、見識の言葉を。私たちに、これらの言葉を与えてください。私たちは、あなたの分まで、清めようとしているのです。私たちは孤独だと思ってきましたが、そうではなかったのです。あなたが、ここにいます。このために、今いるところに、私たちはやってきました。そのことをお伝えしたいのです。(Echeverri 2010: 52)

チュチョは、ジェエバデエカが自分たちの身元を誤解することがないように、と死者に語りかけている。なぜなら今では自分たちが、ジェエバデエカたちを奴隷にし、殺害した白人たちと同じような服装をしていることなどをわかっているからである。現世にいる死者の視点に現れる自分たちのイメージをチュチョは理解し、誤解されることのないよう語り掛けたのである。そして「闇の編み籠」に属する事柄を伝える——犯人の同定は復讐や妖術のかたちをとる正義の執行に結び付く——代わりに、「良い言葉」を殺された死者に求めた。先住民間の暴力を再び動かすためではなく、その余波を鎮めるために。プトゥマヨの森には、過去の暴力を記憶する人びとだけでなく、死者もいる。そのような場所で、社会を再建する試みが始められている。

チュチョたちとは別の仕方で、ゴムブームの暴力の記憶に向き合うウィットの人びとの事例をいくつかサンタマリア (2018) が紹介している。かつてのプトゥマヨにおけるゴムブームの本拠となった家屋は、1994年に先住民の通う学校として整備され、ゴムブーム期の歴史的記憶を継承する施設としても運用されている。サンタマリアによれば、ウィットの二人の女性がその施設で「ムテサの家」というプロジェクトを進めている。「料理、籠編み、伝統的な歌と踊りなどの文化的諸実践を通じて女性に対する癒しの空間を提供する」(Santamaría 2018: 327)というそのプロジェクトは、今日のコロンビアの武力紛争の影響で、ボゴタなどの都市部に避難した先住民女性を対象としたものである。このプロジェクトを通じて、多くの女性が再びプトゥマヨへと戻ったというが、とりわけ重視された「文化的諸実践」は、ウィットのあいだで「闇の編み籠」に対置される「生の編み籠」に属する事柄と深く結びついている。「生の編み籠には焼畑耕作、子どもの養育、食糧の生産、儀礼の挙行をめぐる倫理が含まれ…年長者たちが人間の生をケアし育むために用いられるタバコやココアの言葉〔儀礼的言説ラフエ〕が、その十全な表現とされる」(Echeverri 2010: 56)。「ムテサの家」で共有される「文化的諸実践」とは、プ

トゥマヨでの暮らしでかたちづくられてきた良く生きる方法であり、それらを回復することが暴力の余波に曝されている生に対する癒しとなる。またこのプロジェクトでは、ゴムブーム期を生き延びた女性たちの記憶を回復し、共有する試みもなされている（Santamaria 2018: 326）。かつてプトゥマヨの先住民を襲った暴力が自らの経験に重なる情勢が広がるなか、ゴムブーム期の記憶が機密事項ではなくより良い生を導く力として再発見されるようになっているのである。

親世代の歴史的記憶を現代の暴力の余波を生き抜くために再発見する女性たちは、「ムテサの家」の参加者だけではない。サンタマリアは自らもかかわる別の記憶共有のプロジェクトのことを記している^{xi}。そこで想起された記憶の内容には、例えば、ルフィナという女性の父方の祖母をめぐるものがある。ルフィナの祖母は、かつてチョレラという地域にあったゴム集積の拠点にいた。そこから、生後一か月の男の子——後にルフィナの父になる——を連れて逃げ出した。というのも、その子どもが泣き止まない子だったからである。その女性は子どもと背負い、森の奥に身を隠す。そのまま十三年ものあいだ、いくつかの場所を移動しながら、森で子どもと共に暮らす。そうしてようやく、かつて暮らしていた場所に戻った。しかしその後まもなく、祖母は命を落とす。

この祖母の生の物語は、都市で暮らしていたとき、当時の夫に捨てられ一人で子どもを育てることになったルフィナ自身の経験にも重なる。また彼女は、先住民女性として政治的活動を行っていたがゆえに武装勢力に目を付けられ、拷問を受けたために一時的に避難せざるを得なくなったこともあった。さらにルフィナは、祖母の物語のほかにも、ゴムブーム期の暴力の記憶、とりわけ女性に向けられる性暴力やフェミサイドの物語を父から伝え聞いていた。その内容は、武力紛争の被害を受けた同時代の女性が語る経験談の内容にも重なるものだった。語りを通じてさまざまな人の経験を重ねて思考するルフィナは、「森の奥深くで暮らすことにした人びとは接触すべきではないという強い信念を持っている」（Santamaria 2018: 325）という。森に逃げ込むことは、暴力の余波を生き抜く方法、「もうひとつの癒しの方法」（Santamaria 2018: 325）だからである。『ケルト人の夢』のロジャーが気にもかけなかったプトゥマヨの現実、別のかたちの暴力とその余波が及ぶ情勢にある現代の先住民がより良く生きる力を見出すための資料体となっているのだ^{xii}。

このように、ゴムブームの暴力が吹き荒れていたプトゥマヨには、ロジャーの眼には映らなかったさまざまな現実があった。ロジャーの物語の外にあるその現実、眼を開く人びとは、現代にも、そして、物語におけるロジャーの同時代にも、存在していたのである。そのことに眼を開くとき、ロジャーを通じてゴムブームのプトゥマヨを物語る『ケルト人の夢』という物語は、はたしてそれでよいのだろうか、という疑問を抱かせずにはいないのだ。

参考文献

- Echeverri, Juan Alvaro 2010 To heal or to remember: Indian memory of the rubber boom and Roger Casement's "Basket of life". *ABEI Journal* 12: 49-64.
- CAAP-IWGIA(eds.) 2011 *Libro Azul Británico: Informes de Roger Casement y otras cartas sobre las atrocidades en el Putumayo*.
- Carlos Londoño Sulkin, David 2012 *People of substance: An ethnography of the morality in the Colombian Amazon*. University of Tronto Press.
- Casement, Roger 1912 The Putumayo Indians. *Contemporary Review* 102: 317-328.
- Chaumeil, Jean-Pierre 2014 Entre teorías raciales y exhibiciones: en torno al informe de Casement sobre el Putumayo. In Steiner Sampedro, Claudia, Páramo Bonilla, C. and Pineda Camacho, R. (eds.) *El paraíso del diablo: Roger Casement y el informe del Putumayo, un siglo después*. Ediciones Uniandes. pp. 73-90.
- Mitchell, Angus (ed.) 1997 *The Amazonian Journal of Roger Casement*. Anaconda Editions.
- Santamaría Angela 2017 Memory and resilience among Uitoto women: closed baskets and gentle words to invoke the pain of the Colombian Amazon. *Latin American and Caribbean Ethnic Studies* 12(3): 315-330.
- Sá Carvalho, Carolina 2018 How to see a scar: Humanitarianism and colonial Iconography in the Putumayo rubber boom. *Journal of Latin American Cultural Studies* 27(3): 371-397.
- 崎山政毅 2005 「『通訳者』の陥穽、あるいはプトゥマヨにおける<真実>の政治学」真島一郎（編）『誰が世界を翻訳するのか』、人文書院 pp.171-194
- バルガス＝リョサ、マリオ 2011 『密林の語り部』西村英一郎（訳）、岩波書店。
- 2021 『ケルト人の夢』野谷文昭（訳）、岩波書店。

ⁱ バルガス＝リョサによる『ケルト人の夢』とロジャー・ケースメントが記したプトゥマヨをめぐる資料（『ブルー・ブック』とアマゾンでの日記）については、例えば、（SC: 45）というかたちで、以下の略記号を用いて文献名とそのページ番号を示す。SC=『ケルト人の夢』、BB=『ブルー・ブック』、AJ=*The Amazonian Journal of Roger Casement*。なお、文献リストにある通り、『ケルト人の夢』は野谷文昭による日本語訳を、『ブルー・ブック』については先住民人権 NGO の IWGIA から刊行されたスペイン語版を、日記についてはミCHEル・アンガスの編纂した *The Amazonian Journal of Roger Casement* を参照している。なお、通称『ブラック・ダイアリー』は本稿では参照していない。

ⁱⁱ 物語ではロジャーは自らの計画が頓挫したひとつの要因を、捕虜になったアイルランド人たちの心性に求めているような節がある（SC:407）。

ⁱⁱⁱ ミCHEル・アンガスが後に編纂したアマゾンでの調査旅行で記された日記で、サ・カルバーリョによれば、『ホワイト・ダイアリー』と呼ばれることもある。アマゾンでのケースメントの試みは真実を明かすことというより証拠をつくることであつたと論じるサ・カルバーリョによると、ケースメントは『ブルー・ブック』のほかの証拠として『ホワイト・ダイアリー』を公刊する予定があつた（Sá Cavalho 2018: 392 note1）。

^{iv} ケースメントの先住民観に精神的傾向を決定する人種類型のような、同時代の人種理論の影響があることはさまざまに指摘されている（崎山 2005; Chaumeil 2014 など）。ある文章（Casement 1912）では、プトゥマヨの先住民たちを総称するように、本来的に従順な民として位置付けている。

v 崎山によれば、実際に行なわれたこの特別委員会の報告書の結論は、プトゥマヨの事例について「ラテンアメリカにおける先住民に対する一般的な人種主義の事例として相対化する」（崎山 2005：258）もので、アラナの会社が倒産をするのはケースメントの死後、数年後のことだった。

vi 注 180 は 10 月 13 日付けの日記において、はじめてカテネレの名前が言及された箇所に付されている。その日、委員会はジェイムス・チェイスというバルバトス人からの証言を聞き取った（AJ:175-176）。ジェイムス・チェイスの証言は『ブルー・ブック』の証言者 13 番にまとめられている。

vii なお『ケルト人の夢』には「バルバトス人も全員その話題〔カテネレの反乱〕は避けた」とある。なお『ブルー・ブック』ではフレデリック・ビショップをはじめ（BB: 127）、数人がカテネレの反乱を話題にしている。

viii 『ブルー・ブック』はケースメントの調査にまつわる書簡集というかたちで編纂されている。50 通の書簡のなかで、ケースメントが記したのは、書簡番号 2 番、8 番、9 番、10 番、41 番である。そのなかで、1910 年の調査に基づくプトゥマヨの実態が記されているのは、8～10 番である。8、9 番はケースメントが著者となる報告で、10 番は、計 30 名のバルバトス人たちによる証言録となっている。カテネレによる抵抗のまとめは、書簡番号 9 に組み込まれている。

ix 先住民間の戦争という習慣については、ケースメントも『ブルー・ブック』で指摘している（BB:76-77）。

x セントレの民のあいだでは、平静さ—冷と激しさ—熱（hot）という対は、人びとのモラルを思考するための道具にもなっている。激しさ—熱はほかの生に対する攻撃する力と結びつくのに対し、平静さ—冷は生を育みケアする力と結びつく（Carlos Londoño Sulkin 2012）

xi サンタマリアはサバイバーの記憶を共有する空間をつくるフィッシュボール・プロジェクトを実施しており、ここで参照する論文にはそのプロジェクトで得られた成果が生かされている。ルフィナはそのプロジェクトの参加者のひとりだった。

xii 『ケルト人の夢』の著者であるバルガス＝リョサは、どのような考えから、ロジャーという人物を造形したのだろうか。これは筆者の力量を大きく超えた問いである。だが、同じ著者がアマゾンの先住民を題材とした別の作品、『密林の語り部』（バルガス＝リョサ 2011）において、ペルーの先住民マチゲングの物語世界を通じて、ゴムブーム以後を生きる先住民の森の放浪という主題をあつかっていたことは見逃せない。

『ケルト人の夢』における二人の作家

—「書き」「書かれる」ケースメント—

東京大学人文社会系研究科 修士課程

栗原佑紀子

はじめに

『ケルト人の夢』においてリョサの匠な筆致で展開される劇的なケースメントの人生を夢中で追ううちに、読者は、19世紀末から20世紀初頭の激動の時代を目撃し、北アイルランドからコンゴ、ペルーアマゾンの奥地など諸大陸を旅し、時に、ロンドンの刑務所の独房でケースメントの声に耳を傾け胸を痛める。そして、彼の冒険の幕引きとともに、気がつけば500頁以上にわたる読書を完了しているのだ。読了後の充足感——あるいは喪失感かもしれない——に満たされながら、多くの読者は次のようなことを考えるかもしれない。「はたして、語られたことのどこまでが真実でどこまでが虚構なのだろうか?」。それがたとえ、『ケルト人の夢』が歴史書でも実在のロジャー・ケースメントの伝記でもなく、小説という創作であることを重々承知していても、である。

この問いに、自身も卓越した文学研究者であり、小説創作の方法に極めて自覚的である作家リョサは簡潔に答えるだろう。「文学を通じた過去の再構築はほとんどいつも虚偽をはらむ。文学的真実と歴史的真実は別物だ。」そして続ける、「たが嘘まみれにもかかわらず——というより、だからこそ——文学は、歴史家の書く歴史に現れない歴史を物語る。」(バルガス＝リョサ 2010: 19) これは、リョサが1990年に発表した書評集『嘘から出たまこと』の冒頭の文書であるが、卓抜したガブリエル・ガルシア・マルケス論であり自身の創作技法についても多くを明かす『ガルシア・マルケス論 神殺しの物語』(1971)や、多くの評論、エッセイで同様の趣旨を繰り返し述べている。『世界終末戦争』(1981)や『チボの狂宴』(2000)、『楽園への道』(2003)などリョサの代表作として挙げられる史実を基にした小説群はもとより、『フリアとシナリオライター』(1977)など自伝的部分が含まれる作品を執筆したこのノーベル賞作家が「文学的真実」と「歴史的真実」の峻別に意識的であり、そしてその操作に長けていたことは言うまでもないだろう。

こうした自身の創作姿勢を強調するように、『ケルト人の夢』のエピローグで作者は次のことを明らかにしている。執筆にあたり、同作の重要な一次資料であるケースメントの日記(いわゆる「ブラックダイアリー」)の解釈、取り扱い方について、リョサは一小説家としての彼自身の印象に従ったと明言する(バルガス＝リョサ 2021: 506)。具体的には、ケースメントが日記に書いた卑猥で有害とされる事柄——主に、未成年を含むあまたの男性との刹那的な性行為と露骨な描写の数々——について、ケースメントは実際にそれらを経験したわけではないか、もしくは少なくともすべてを経験したわけではなく、「そこには多くの誇張やフィクションが含まれている、彼が書いたある種のことは、それを生きたかったが、実際にはできなかったことなのだ」(同上)と解釈している。実際には行われなかった性交渉について仔細書き留めるという描写は『ケルト人の夢』の中に何度か現れるが、以下顕著な例を一つ引用する。

ロジャーはひどく不愉快になり、その不快感のために体の調子がさらに悪化した。(中略)ある日の午後、無力感と闘って負けそうになった彼は、日記に自分の夢想をこう書きつけている。「一晩に三人の相手、そのうち二人は船乗りだ。彼らは六回も僕にアレをした! ホテルに着くまで子を産んだ女みたいにガニ股で歩いた」気分は悪かったが、自分が書いたことがあまりにオーバーだったので、思わず吹き出した。人前ではきわめて礼儀正しく品の良い言葉を使う彼は、プライベートな日記には淫らなことを書きたいという、抗いがたい欲求を常に感じていた。理由はわからなかったが、卑猥語を使うと気分がよくなるのだ。(338、強調筆者)

この「ブラックダイアリー」の真偽については諸説あり¹、実際のケイスメントの日記と『ケルト人の夢』における該当部分の描写を比較することは本稿の目的ではない。本稿における私たちの関心は、日記に散見されるこうした露悪的で猥雑な記述がケイスメントの夢想であると、上掲のエピローグのなかでリョサが明示していることにある。こうした解釈やナラティブ上の操作を指して、実在人物に関する記録や「公式見解」の歪曲であると批判するのは早計であることは上述に示した通りである。ここでもう一度『嘘から出たまこと』に目を通してみると、その巻頭のエッセイでリョサは、現実(史実、伝記的事実など)のしもべに徹する歴史書やルポルタージュと異なり、小説は「生に反抗し、これを侵犯する」(バルガス＝リョサ 2010: 19)ものであると述べている。実生活とは、求めてやまぬが達成できないことの連続であり、そうした「悪あがきが煮えたぎり、欲求不満が脈を打つ」(10)「実生活と、それを豊かにする欲求・幻想、両者の間にできた隙間を小説文学が埋める」(16)と述べる。

ここにおいて、「実生活と、それを豊かにする欲求・幻想、両者の間にできた隙間」を埋めるため日記に夢想を書きつけていた——とリョサは解釈をした——ケイスメントの姿を思い出してみよう。「ブラックダイアリー」という日記を書くケイスメント、つまり「個人としての自分、なりたくてもなれなかった自分、空想によってしか創りあげられることができなかった自分——つまりは秘密の歴史——を語る」(25)のために空想まじりの日記をつづるケイスメントに、自伝的フィクション/オートフィクションを執筆する作家の姿を見出すことはできないだろうか。その帰結として、「オートフィクションを書くケイスメント」を書く作家・リョサという二人の作家の存在を『ケルト人の夢』に見て取ることはできまいか。もちろんこれは、メタフィクションの入れ子構造や枠物語を指しているのではなく、実際に同書の語りの構造はこのようにはなっていない。そうではなく、リョサは、実在の「ブラックダイアリー」という一時資料を巧みに「利用」することで、『ケルト人の夢』のテキスト内部に作家・ケイスメントを創りだしその彼に自分の物語を一人称で書かせた。それによって、『ケルト人の夢』という大きな小説空間のなかにもう一つのフィクションをシームレスに入れ込んでいるのである。実際、ドン・キホーテのように滑稽なまでに正義と理想を追求し、高潔の人として尊敬——それゆえ時には嘲笑——され、外交官や政府の代表団の立場ある人間として品行方正を心掛ける彼の、懊悩、欲求不満、孤独、精神不安定を読者に提示するにあたり、同作の大部分を占める三人称の語り手に語らせるよりも、日記を通じてケイスメント本人に赤裸々に語らせるという方法は実に効果的であろう。そして「語らせる」という表現からも明らかなように、「書く」行為の主体としてのケイスメントには、必然的に、リョサによって「書かれる」客体としてのケイスメントも

¹ 2002年以降実施されてきたブラックダイアリーの真贋をめぐる調査や鑑定については、中村麻衣子「ロジャー・ケイスメントとは誰なのか?—コンゴ、同性愛、アイルランド蜂起」『テキスト研究』、2009年、5号、pp. 72-84に詳しい。

内在しているということも留意すべきであろう。

以上のことから本稿では、ケイスメントの日記に着目することで、「書く」主体であるケイスメントと「書かれる」客体であるケイスメントを分析し、そこからリョサのナラティブの技法やその効果を確認していく。

オートフィクションとしての「ブラックダイアリー」

ケイスメントがコンゴやペルーその他の場所で行った同性愛行為が仔細書き記された、いわゆる「ブラックダイアリー」に関して、前述の通りリョサは、実際に起こった出来事や体験したものとケイスメントの単なる妄想や空想もしくは事実を誇張・脚色した記述が混じり合ったものとしている。これは、写真に写されているものは真実であると同様に、日記に書かれたことは実際に起こったことであるという、日記が有する「真実との根強い象徴的な関係やつながり」(Ferguson: 272)という屈託ない前提を否定するものである。

ここで、虚構を含む日記の可能性について考察するにあたり、一つの根本的な問いを立てることができるだろう。それは、日記というテキストは常に、書いた者がその日に観察し体験し思考した事物を偽りなく記したものでなくてはならないのか、という問いである。フランスの文芸評論家ベアトリス・ディディエは、1976年に出版した『日記論』において、日記を完全に定義づけるのは難しいと前置きをしたうえで、いくつかの異なる日記の特徴を挙げている。例えば、案外見落とされがちな特徴として、日記に書かれた出来事が実際に起きた時点と執筆行為のあいだにある時間のずれが挙げられる。それは数時間のこともあれば、数日、数ヶ月のこともある。大急ぎで箇条書きされた日記もあれば、書き直されたり、構成がより練られていたり、清書された日記もある。内容の点でいえば、旅日記のように出来事や逸話にあふれた活動的な日記もあれば、獄中日記のように単調に繰り返される日々を記録するものもある。作家たちの創作日記、療養中の日記、夢の日記など枚挙に暇がない。このように、単に日々の出来事を書き留める「記録装置」(ディディエ: 16)として機能する日記群がある一方、「体じゅうに溢れる思想と感情を、誰もわかってくれないし耳を傾けてもくれない」と嘆く日記作家の「相談相手」(17)の役割を担わされてきた日記群も古今東西存在してきた。この「相談相手」として日記が存在するとき、日記作者は自身の欲望に従い、現実だけでなく密かな願望、夢想、虚構を書き記す自由を自らに与えることができる。また、ここで先ほどの問いに戻ると、「真実との根強い象徴的な関係やつながり」を破った日記、つまり虚構と共存関係にある日記の存在は決して異端ではなく、ディディエの言葉を借りれば「古典的」でさえあるのだ。

すると、コンゴやアマゾンの奥地で目の当たりにしたことを仔細記録し、夭逝した母や祖国に込めた想いを書き連ね、時に、体調不良や日々のフラストレーションをぶつけるように日記に向かうケイスメントに、単なる「記録装置」として日記を利用するだけでなく、「相談相手」である日記に語りかけ夢想や妄想を書き連ねる切実な日記作家の姿を見出すことができるだろう。リョサは『ケルト人の夢』において、ケイスメントと日記の不可分の関係性を最大限利用し、『ケルト人の夢』の主人公として「書かれる」客体だけでなく、日記作家/オートフィクション作家として執筆の自由つまり「書く」主体としての役割をケイスメントに与えることで、日記と言う体裁のオートフィクションを『ケルト人の夢』内で展開させていると考えられないだろうか。

具体的なテキストの分析の前に、まずは簡潔にオートフィクションについて説明する。オートフィクションとは、フランスの作家セルジュ・デュブロフスキー(1928-2017)が、1977年に発表した自身の小説『糸/息子(*Fils*)』について紹介するにあたって案出した造語であり、彼の定義によれば「オートフィクションとは、まぎれもない事実と出来事に基づいたフィクションであり、伝統的な小説、あるいは新しい小説の良識からは外れたところで、ひとつの冒険をめぐる言語を、言語の冒険に託したものである」²。デュブロフスキーの定義はその後のオートフィクションに関する議論を予見するかのよう曖昧で多義的であるが、自伝研究の第一人者フィリップ・ルジュンヌが『自伝契約』(1975)で試みた自伝の定義すなわち作者＝登場人物＝語り手の同一性の担保を引継ぎつつも、そこで語られる「自分自身の存在(中略)自分の個人的生涯、特に自分の人格の歴史」(ルジュンヌ：16)の厳密な再現だけでなく、そこへ虚構が介入し、それによって再構築された物語群と大まかに定義できであろう。用語がつくりだされたのは1977年であるが、日本の私小説との近似がよく指摘されるように、小説と自伝が交差する文学の形式は洋の東西を問わず古くから存在してきた。またデュブロフスキー以降さまざまな小説家や批評家がオートフィクションの定義を拡大し、フランスを中心にジャンルが発展している。また、本章で問題となる同ジャンルと日記の組み合わせに関して、同じく主にフランスでは1990年代から多くの作家が日記形式のオートフィクションを執筆しはじめ、オートフィクションの構造の主流が、自伝のそれから日記の構造へ移行したという指摘もある(Ferguson：267-68)。

日記形式のオートフィクションについて私たちに手がかりを示す作家にアンドレ・ジッドがいる。ルジュンヌは『自伝契約』において、「(その)全生涯と作品は、自己のイメージの構築と産出に向けられているように見える」(ルジュンヌ：241)作家ジッドの一群の「私的エクリチュール」について論じているが、その中でも特に日記と書簡に着目している。従来の自伝物語の作者——自伝物語の特性上それは同時に物語の主人公「私」と同一である——は、自らの人生の歩みや人間性に一貫性や筋道を与えんがために、人生や一個人の人格につきものである複雑さや曖昧さの処理に苦心する。ジッドはそこにフィクションという動性を導入した³。

フィクションの体制は、ジッドによってしばしば、自分を完成させてくれると同時に自分自身を清算させてくれる健康法、下剤の服用〔浄化〕という捉え方で表現される。彼は、自伝的な「自我」に陥らずに、仮説、潜在性という形で「私」と言うことが可能になるこうした演習に、大きな喜びを味わう。(244)

ジッドがこうした下剤の効能に頼るとき、彼は「常に彼の中で働いている矛盾(中略)性欲にのしかかる二重の禁止(性欲一般の抑圧。異性愛を規範と規定すること)」(259)に直面していることが多い。実際に彼の同性愛の経験についての描写は一連の私的エクリチュールのなかでもほのめかされ、実際に経験したことなのか否か謎の領域に埋もれたままになってい

² フィリップ・フォレスト「オートフィクションと自分」小黒昌文訳、2018年、立教大学フランス文学研究室

³ ルジュンヌは、厳密な自伝的要素にフィクションを導入することで二つの要素が互いに補いあい、物語の総体その「全体性のレベルにおいて自我のイメージに到達する」(245)と述べる。こうしたテキストの相互作用によって作り出される結果物を「自伝空間」と呼んでいる。

る。(254)

対外的な自らの人格に一貫性を与えるためある種の逸脱を秘匿し、日記を用いてその抑圧の憂さ晴らしや浄化を行うジッドの姿と、高潔さと人道的行いで名を成した外交官という対外イメージにそぐわない買春行為や同性愛行為を日記に打ち明けるケイスメントの姿には多くの符合がみられる。この文脈において、以下からは、『ケルト人の夢』において、ケイスメントがどのように真実と虚構が混在する日記形式のオートフィクションを執筆していたか分析を行う。

日記形式のオートフィクション作家・ケイスメント

オートフィクション作家としてのケイスメントの本領が発揮されるのは、上述のように、極めて私的な部分、特に情欲に関する描写においてである。彼はゲイであることを自覚してからというもの、あまたの男性と関係をもったというが、しかし「楽しむことは楽しんだが、愛したり愛に報いたりすることは学ばなかった」(バルガス＝リョサ 2021: 315)。そして、「(他人と愛情深い関係を築くという)この領域でも彼の人生は完全な失敗」(同上)であることを認め、そうした「ひそかな情事のあと、ロジャーはいつも深い悲しみに襲われ」(316)ている。

一方で、男たちと繰り広げる刹那的で時に暴力的といえる性行為を日記に描きだす筆致はときに汚言症的程度にまで達しており、コンゴやアマゾン奥地で繰り広げられる残虐な植民地政策や、外交官や政府派遣調査団の立場から先住民の虐待を告発するケイスメントの姿に慣れた読者は困惑さえ覚えるだろう。言葉による自傷行為といえるほど自身を乏しめ痛めつける下卑た表現は、特に性的欲求やフラストレーションが高まったさいに爆発する。例えば、バルバドス島の公衆浴場で出会った男に手荒い扱いを受けた後には、「《公衆浴場。スタンリー・ウィークス——アスリート、若者、二十七歳。巨大、ものすごく硬い、少なくとも九インチ。キス、噛む、挿入されて叫ぶ。二ポンド》」(332)と書き残している。スタンリー・ウィークスという個人の特徴は性器の明け透けな描写に単純化され、その行為に情愛は介入せず、買春の値段が手短かに報告されることでなおさら行為の不毛性が強調される。

また、何らかの理由によって達成されなかった性行為について、空想や虚構を織り交ぜながら日記のなかの「もう一人の虚構の自分」に代理で行為をまっとうさせることで、フラストレーションの昇華を試みることもたびたびである。先ほどと同じくバルバドス島の公衆浴場で出会った美しい若者に素気無くあしらわれる場面と、一夜の相手を求め寄港先のブラジルのパラーの街路を歩いていた際に浮浪者に襲われた場面が続けて引用する。

こちらからこっそり目で合図を送ってもそのなんとも美しい若者はまるで無関心なので、彼は胸がちよっぴり痛かった。(中略)ロジャーはアイスクリームを食べないかと誘ってみたが、若者は断った。

ホテルに戻るとき、興奮を覚え、日記帳に、最も個人的なエピソードに用いる下卑た言葉を電文体で書きつけた。《公衆浴場。聖職者の息子。実に美しい。長く繊細なペニスが僕の手の中で硬くなる。口で受ける。二分間の至福》彼は手淫を行うと石鹸を丁寧に塗り、また入浴した。そうしながら、こういうときによく襲われる寂しさと孤独感を払いのけようとした。(329)

なぜならマルコもオリンピックもベベーも(そういう名前だったろうか?)現れず、それ

どころか子どもみたいな、ぼろをまとった二人の浮浪者に襲われかけたからだ。(中略)彼は憤慨しながらホテルに戻った。だが日記にこう書き記すと怒りは収まった。
「プラーサ・ド・パラシオ。太く実に硬かった。息もできないほど。下着に血痕がいくつか。痛みが快感」(333-34)

筆者は上掲で「フラストレーションの昇華を試みる」と書いたが、この試みが実際にいつも達成されたわけではないことがこれらの引用部から分かる。怒りや性欲の一瞬の発散には功を奏するが、その後にやってくる虚無や孤独からは逃れることができないからだ。またどちらの引用からも明らかなように、三人称で展開される地の文と二重山括弧でくくられた一人称の日記引用部の間には、同じ行為を語っているにしてもその真偽や文体において明確なコントラストが見られる。この対照は、ケイスメントの中に内在する公私の間に深く刻まれた断絶でもあり、また「世間から尊敬を受ける人物」という分かりやすくも一面的なケイスメントの人格に陰影を与えるリョサの小説技法の証でもあろう。

そして、日記と日記作家の蜜月関係は長くは続かない。それどころかケイスメントの懊悩を一手に引き受ける「相談相手」としての日記は、最後には裏切者に豹変し、良き聴き手となること放棄し彼を突き放すことになる。この決定的瞬間が訪れる前から、相談者と相談相手の間にある不和はほのめかされてきた。のちにケイスメントが獄中で述懐するように、「経験していないことを、したと思わせるように書くことは、すでに暗黙の罰をもたらす。すなわち挫折感と欲求不満」(419)なのであり、ケイスメントは「オートフィクションの主人公/虚構のもう一人の自分」の放埒さを通じてしか情欲を達成できないという挫折感に見舞われ、欲求不満が残存する自らの身体を引き受けなければならない状況に陥る。日記はこうした状況を打開することはできず、相談者が苦悩する様をながめるだけである。そして、この日記作家ケイスメントと日記の間に生じる緊張関係は、「相談相手」が「密告者」⁴になるという決定的な裏切り行為によって終結する。当該の日記はいわゆる「ブラックダイアリー」として英国当局の手に渡り、権力者の間で回覧され、新聞などのメディアでセンセーショナルに取り上げられ、ついには恩赦というケイスメントの希望を打ち砕くだけでなく、人権活動家や外交官としての業績や名声をたちまち無効化し、不名誉と汚名とともに彼を絞首台に送るのである。

『ケルト人の夢』の読者は、作中の冒頭数ページで、問題の日記のスキャンダラスな内容が原因となりケイスメントの恩赦の実現が難しいことを理解することになる。そして、物語が展開していくとともに、高潔で尊敬に値する公の姿と強烈なコントラストをなす彼の孤独な私生活——不毛な性生活や唯一得た恋人クリステンセンの裏切り——とあえて猥雑な文体で妄想の自罰的性体験をつづるオートフィクション日記作家としてのケイスメントの姿を目の当たりにしていくことになる。虚構とのむなしい戯れがやがて自身の首を絞めることを知っている読者たちは、こうしたケイスメントの姿に同情を覚え、彼の窮状に胸を痛めるよう巧みに誘導されていく。そしてその導き手とは、日記作家としてのケイスメントを操るリョ

⁴ ここで想起されるのは、同じくケイスメントを英国に密告したアイヴィント・アドラー・クリステンセンである。日記と同じく「相談相手」であり、「オートフィクションの主人公/虚構のもう一人の自分」ではないありのままのケイスメントが初めて得た誠実な恋愛相手であるクリステンセンの裏切り行為の深刻さが改めて強調される。

サその人である。ここで再び思い返したいのは、本稿の冒頭で挙げたリョサの自家葉籠中の物である歴史的真相と虚構の操作である。繰り返しになるが、この操作で得られる効果は、「歴史的事実を歪曲するのではなく、その重要性や意義を強調して、読者を主人公たちに感情移入させ、物語の中へ引き込んでいく」(バルガス＝リョサ 2019: 257)ことである。リョサは、一次資料である実在の日記を創作のインスピレーションや材料として使用するだけでなく、『ケルト人の夢』に「書かれる」受動的な主人公としてはもちろん、「ブラックダイアリー」という日記形式のオートフィクションを能動的に「書く」日記作家としてのケースメントを誕生させた。そして、悲しき日記作家ケースメント本人に直接記述させ、一人称で書かれた日記のテキストを示すことで、読者をケースメントの人生へとさらに没入させる。物語の登場人物に、「書く」行為の主体と客体の二役を与えたリョサのナラティブの手法の妙と言えるだろう。

おわりにかえて ー誰のために誰を「書く」のか

本稿では、日記という私的エクリチュールにまつわる「書く」行為に注目してきた。しかし『ケルト人の夢』において、「書き」「書かれる」という能動/受動のダイナミズムは、リョサとケースメントの間にのみ発生しているものではない。ケースメントがコンゴやプトゥマヨで書き残した公的なテキスト群における、書くことの主体としてのケースメントと、彼に記述される客体としての先住民たちに着目する必要もあるだろう。

ケースメントは、苛烈な植民地的政策や帝国主義に搾取の限りを尽くされていたコンゴ自由国とペルーアマゾンの奥地プトゥマヨの惨状を、時に探検隊の一員として、時に外交官として、調査団の一人として見聞しその実情を克明に記録した。英国民と言う特権的立場から、英語という覇権言語を用いて両地域の凄惨な状況に関する報告書を物し、それはやがて世界へと発信される。こうした公的なテキスト群は、列強を中心に各地に戦慄と反響をもたらし、搾取に苦しむ先住民たちを非人間的な程度にまで極まった窮状から救い出すべく、列強諸国の政府や諸団体が行動を起こすよう促した。このように、ペン一本で国際世論を形成したケースメントを、「黒人の友」(バルガス＝リョサ 2021: 58)や「イギリスのバルトロメ・デ・ラス・カサス」(74)と人々が呼びならわすのは順当な帰結のように思われる。しかし、それぞれの表現が言外に伝えているのは、白人にもかかわらず「黒人の友」で、征服者側であるにも関わらず先住民の窮状を訴えた「バルトロメ・デ・ラス・カサス」という、コンゴやアマゾンの奥地で虐げられる人々を前にケースメントが有する圧倒的な優位性と矛盾/二重性である。

コンゴの場合はベルギーの植民地政策、プトゥマヨはグローバルな資本主義の負の帰結として「持てる側」が「持たない側」を搾取していた構造であるが、これを告発するケースメント自身も純然たる正義の人という個人の資質とは別に、表向きは帝国主義を推し進める大英帝国の外交官であるという点は留意されるべきである。また、コンゴ、プトゥマヨの先住民はそれぞれの国の公用語であるフランス語とスペイン語で意思疎通ができないため、ケースメントは先住民言語をある程度理解するものの、聞き取り調査などは通訳を介して行っていた。そうして得た情報を、今度は、当時の国際社会の中でも覇権言語であった英語で書き英国外務省から発表したことは前述の通りであるが、こうしたテキスト外の諸条件が国際世論形成に大いに寄与したことも同様に私たちは考慮しなければならない。

こうした状況を、ポストコロニアル研究の視座から分析し、植民地主義や資本主義に搾取されるサバルタンの声を、ケースメントがペンで代弁/表象すること、この不均衡な「書く」「書

かれる」の力学に発生する危険性を指摘することは可能で、わかりやすい指摘のように思われる。しかし、ここで再び手短かに言及しておきたいのは、『ケルト人の夢』に表象されるロジャー・ケイスメントは常に矛盾や二重性をはらんでおり、例えば、大英帝国の外交官という特権的な地位の裏側には大英帝国内の「持たない側」であるアイルランド人/ケルト人の姿が隠れているという点である。現に、虐げられたプトゥマヨの先住民たちにアイルランド人の姿を重ねる描写もあり、ケイスメントのなかには英国人エリートの「持てる側」と大英帝国内アイルランド人としての「持たない側」の両面が共存することから、ケイスメントがサバルタンを「書く」ことで代弁/表象する行為を単純に批判することは、本作においてはその限りではないと言えるだろう。現に、ケイスメント本人もリョサに「書かれる」ことによって、アイルランドやイギリスの正史では長らくタブー視されていた自らの人生を語る権利を得たと言える。つまり、ケイスメントはコンゴやアマゾン奥地のサバルタンたちを「書く」立場でもあったが、同時にアイルランド人という出自、性的マイノリティ性、大国同士の利害から「大きな歴史」のなかで声を奪われてきた側でもある。ポストコロニアル理論の旗手の一人ホミ・バーバは「声を持たない側」の語られる権利について下記のように記した。

(ナラティブの権利)は自由に対する人間の根本的関心のメタファーであり、自分の話に耳を傾けてもらい、認められ表象してもらう権利でもある。(中略)植民地化、アパルトヘイト、ホロコースト、ベトナム、アフガニスタン、南アフリカ、ルワンダ、コソボといった、過去や現在の沈黙に支配された殺戮現場に、気が重いことであっても、わたしたちは思いをはせるべきなのだ。そこで沈黙を強要された人びとにたいして、声を与えるよう試みるべきなのである。(バーバ: 7-8)

ケイスメントは『ケルト人の夢』において、リョサとある種の共犯関係を結びながら「書き」「書かれる」権利を行使することで、バーバがいう人間の根本的関心を追及、達成したと言えるだろう。そしてこのような権利の授受を可能にしているのは、同作を執筆するにあたりリョサが採用した二つのアプローチ、一つは、歴史の「史実」の部分を真摯に探求した歴史家的なもの、もう一方は、「史実」の隙間やもしくは「史実」そのものを解釈し直し「新たな史実」を創り出す小説家としてのそれである。『ケルト人の夢』に書かれるケイスメントは、激動の時代を生きた人々がのちに語ることになるそれぞれの歴史——「勝者の歴史たち(複数)であると同時に敗者の歴史たち、中道主義者の歴史であると同時に地方人(そして植民地人)の歴史、かずかずの歌に歌われた少数者の歴史であると同時にまったく歌われることのない多数者の歴史」(ハッチオン :104)——の混交であり、リョサは上述の二つのアプローチによって多面的で奥行きのある物語を構築することはもちろん、現代の読者に新たな解釈のロジャー・ケイスメントを提示することに成功したと言えるだろう。

参考文献

バルガス＝リョサ, マリオ

－『嘘から出たまこと』寺尾隆吉訳、現代企画室、2010年

－『プリンストン大学で文学/政治を語る バルガス＝リョサ特別講義』立林良一

訳、河出書房新社、2019 年
－『ケルト人の夢』野谷文昭、岩波書店、2021 年

ディディエ, ベアトリス『日記論』西川長夫、後平隆共訳、松籟社、1987 年

ハッチオン, リンダ『ポストモダニズムの政治学』川口喬一訳、法政大学出版局、1991 年

バーバ, ホミ『ナラティブの権利 戸惑いの生へ向けて』磯前順一、ダニエル・ガリモア訳、みすず書房、2009 年

ルジュンス, フィリップ『自伝契約』花輪光、井上範夫訳、水声社、1993 年

中村麻衣子「ロジャー・ケイスメントとは誰なのか?—コンゴ、同性愛、アイルランド蜂起」『テキスト研究』、2009 年、5 号、pp. 72-84

森本淳生「主体、欠如、反復：レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムッシュー・ニコラ』と虚構的自伝」、『人文・自然研究 = Hitotsubashi review of arts and sciences』7 号、pp.87-143

森本淳生『「生表象」の近代：自伝・フィクション・学知』、水声社、2015 年

Boller, Ana. “Novela archivo y *el sueño del celta* de Mario Vargas Llosa”, *Chasqui revista de literatura latinoamericana*, Vol. 49, Num. 2, 2020, Western University, pp. 162-175

Ferguson, Sam. “Autofiction and the Diary: The Radicalization of Autofiction in Works by Hervé Guibert and Christine Angot”, *The Autofictional. Approaches, Affordance, Forms*, ed. Alexandra Effe and Hannie Lawlor, 2022

Lejeune, Philippe. *On Diary*, ed. Jeremy Popkin and Julie Rak, trans. Katherine Durnin, University of Hawaii Press

はじめに

本稿は、バルガス＝リョサ¹の著作『ケルト人の夢 (*El sueño de la celta*)』で描かれるロジャー・ケイスメント²の生において中心的役割を果たしている「sueño (夢)」について、スペイン思想の観点を通じて考察するものである。

本考察ではロジャーが作中で抱いている夢はナショナリズム、セクシュアリティそして真の愛の三要素を含む「自己の実現」として表現されていると考える。

しかし、この夢は見終わることも叶うこともない「見果てぬ夢」なのだ。つまり、筆者はこの「自己実現」というものを本質的に獲得不可能な夢であると考えている。

夢は人間が手中に収めることができるような物象化された概念ではないし、むしろそうされることのない概念なのである。それゆえ筆者は、これまで人間が夢を完全に獲得したことはないとここで前提しておきたい。

夢は、未完結性とユートピア性をその内に秘め、それゆえ夢が内包するその輝きは人間を魅了する。そして夢に魅せられた人々はその獲得に向けて様々な行為を行うのである。

「夢」が持つ性質は、スペインの思想家フェルナンド・サバテール³の思想における「幸福」の概念との連関を感じさせるものである。なぜなら双方とも実現不可能（未完結なもの）でありながら、我々を魅了するユートピア性をその内に孕んでいるからである。

しかし、獲得不可能とはいえユートピアとしての夢が持つ輝きが人を強烈に誘惑することは変わらないし、我々はそれを求めずにはいられない。

そしてこの輝きは時として人々の理性を泥酔させてしまう。ひとたびこの泥酔状態に陥ると最後に待ち受けているのはしばしばその身の破壊や破滅的な状況である。この破滅的な状況は物語本編終盤におけるロジャーが置かれたものでもあるし、スペイン語圏文学の視点から見てみるとドン・キホーテが陥った狂気とも関連付けられるものなのではないかと筆者は考える。

1. 夢 (sueño) について

1.1 sueño の語義について

これより「夢」についての考察を始めようと思う。この考察は主に二つの観点から行われるものである。第一に、スペイン語の「sueño」を手掛かりにその語源における二つの意味の同居に関して考察する。第二に睡眠の最中に訪れる「夢」という現象とそこにおいて現れるフィクション（虚構）としての現実についての考察を行っていく。

でははじめにスペイン語の「sueño」の考察を始めていこう。この語は睡眠時に見る「夢」と理想を表す「夢」の双方の意味を持つ語である。語源はラテン語の中性名詞 *somnium* の動詞形 *somniō* と男性名詞 *somnus* のふたつであり、*somniō* は「夢を見る、空想にふける、うっとりする」という意を持ち、*somnus* は「睡眠、眠り」の意を持つ語である。また、前者の派生元である *somnium* は「夢」そして「幻想」の意を持っている。

注目したいのは、生理現象として睡眠時に現れるフィクションとしての現実世界と欲望と

しての理想が、同じ「夢」という語の中に居住していることだ。そしてこれは、我が日本語や英語などの他言語にも散見される⁴。

これを踏まえて言及したいのは、我々人間は生理現象と内的な理想のこのふたつの間に共通点を見出す傾向にあるということだ。思うに、この生理学的（fisiológico）なものの理念的——理想的——（ideal）なものの間にある共通点を理解するためには先に指摘した第二の点に関する考察を始めねばならない。

1.2 夢という現象とフィクション

本稿では主にロジェ・カイヨワ⁵の『夢の現象学』における議論とサバテールに依拠して夢の考察を行う。

先ほど生理学的なものと形容した方の夢は、思うに外見上は臨床学的に取り扱われ得る生理学的な現象であって科学の範疇に収まるものである。だがその実、夢を見る当事者からしてみれば、その中で経験するのはまさに現実として現象しているところの非現実である。すなわち、夢の中で経験するのは現実の虚構（フィクション）なのであって、その虚構は外的な科学的分析を受け付けない内的な経験なのである。

こういったことはおそらく、夢という場が所有する非時間的な性質に起因する。生理学的な夢とはその中では限定的作用を持つ時間性⁶が必然的に止揚されてしまうがゆえに、その内部に生理学的に説明できるような現象——感覚世界の現象——を超えた抽象的な場を包含する。それゆえ、非現実としての現実、すなわちフィクションとしての現実が夢の場に現れることができるのである。

このことは『ケルト人の夢』でロジャーが見ている夢にも表れている。彼の夢では亡き母アン・ジェファソンが現れたり、仲を違ったはずの親友が共に戦っていたりするのだ⁷。夢の中でのこれらの経験は時間による規定を無視している非現実である。だがロジャーはその経験を本当のこととして夢見の中で受け止める。

サバテールは、夢は時計への嘲笑であり醜聞である⁸と言ったが、まさにこの非時間性によって夢のなかに様々なフィクションが現れる。そしてこの種の非現実が夢見の主体からしてみれば、ほんものの現実とは区別ができないものなのである。

思うに、このような区別の困難さが起因するのは夢における非現実が持つ現実性（ほんとうらしさ）である。カイヨワは『夢の現象学』において夢と現実との境界のあいまいさについて、夢を見ている時にも我々は自分が目覚めていると思っている⁹ということに由来していると言及している。夢と現実の間に引かれているのはあまりにも不確定な境界線なのだ。

カイヨワは夢の中では意識の辞任¹⁰が起これと指摘する。これは思うに、図式的に捉えるなら、バタイユの思想において非-知（non-savoir）と対立する「推論的思考」¹¹の辞任と読み替えることができる。この思考は分別知を意味し、合目的かつ合法則的な思考であり体系的な思考である。

この思考の辞任が何を意味するのかというと、現実か非現実なのかを判断する権能の剥奪である。それゆえに、夢の中で目の当たりにするものは現実そのものではないのにもかかわらず、そうとは気づくこともなく現実そのものとして受け取ることを我々は強制されているのである¹²。

フィクションには様々な定義があるが、サバテールの思想においては真実の仮の姿として考えられ¹³、更新可能な真実として、通常の意味で考えられるような絶対的で不変な真実にとって代わってその座に就くものとなっている¹⁴。

ここまでの議論を踏まえると、夢とはフィクションが十全な真実性をもった現実として現象する場合なのであると示せると考える。今福（2019）がフィクションこそ「ボルヘスの最も深い「真実」裏打ちする決定的な方法でもあった」¹⁵と述べていることも、これを裏打ちするものであろう。

さて、ここまで生理学的な夢について論じてきたが、次に論じたいのは夢（sueño）という語が示すもう片方の種の夢、すなわち、欲望や憧憬とつながりを持つ理想としての夢についてである。

1.3 理想としての夢の誕生

生理学的な夢は、真実の似姿であるフィクションが起こる場であり、その中では推論的思考が退隠してしまう場である。その経験のうちに、夢に対して理想としての夢という新たな意味を人間が付する時点があると次のようにカイヨワは指摘する。

夢もまた生まれるためには、意識の辞任を必要とする。意識が日常的な無の中でひとたび自失するや、夢は朦朧とした精神にきわめて深く根を下ろし、そのため精神は、この絵巻が現実のそのものであるかどうか疑う方途を見失う。目覚め、みずからの一時的な欠如から立ち直れば、意識は目前のこれらの幻惑を想い出す。人間はなんの悦びもなしに疲れはて、空しく神経を苛立たせる仕事に専念するために、空虚な幻想を唾棄するその瞬間には、自分が魔法にかけられた王国の中にもっとも真実でまた最良の自分自身を置き忘れてきたのではないかと自問せずにはいられない。人間が〈夢〉という言葉に一つの新しい意味を与えるのはこのときである。つまりそれは、人間に幸福と同時に安逸をもたらす一つの不可思議な世界、という意味である。かれはその世界の中に、昼間の様々な気苦労によってそこから無残にも遠ざけられていると思われる楽園を位置づけ、自分が王であり、なにものにも煩わされることのない幻想と自由のエデンを位置付ける。そのとき、〈夢〉は〈欲望〉とおなじものになる。もっと正確に言えば、〈実現不可能な欲望〉とおなじものになる。夢とはもはや睡っている人が修正をほどくことのできぬ夜の版画を指すのではなく、目覚めているとき、想像力が一種の自由裁量権にもとづいて、なんの制限もなしに好むままに仕立て上げる理想の世界を指す。想像力はこの世界を不断に作りかえる。想像力を魅惑する一切の新しさがそこに導入される。そして想像力を束縛し、あるいは想像力の気に入らぬものはすべて追放される。この世界は一つの慰め、一つの祝祭である¹⁶

ここでカイヨワが、夢に新たな意味が付与されるその時に夢が欲望と一致すると指摘していることは注目せねばならない。

これまでの議論で明らかとなったように生理学的な夢の中では分析的ないし推論的な思考はその権能を奪われる。それゆえに我々はその夢の中での出来事を外的な目的や法則などのフィルターを介さず直接的に経験し、その出来事を真であると認識する。そして我々は夢のなかで自分が望んでいたことを体験することもしばしばあるのであって、サバテールが指摘するようにそのなかで愛や詩作、冒険を経験する¹⁷こともときおり起こるのである。すなわち、我々は夢の中では現実世界における制限などから解放され、自由に理想的な（ideal）ことを経験出来るのだ。

思うに、このようなことから 1.1 で議論した夢（sueño）という語における二つの意味の同居が発出するのである。すなわち、この時に、生理現象として眠りの中に現れる非現実を指す意味に加えて、我々人間が抱く憧憬や欲望、理想としての意味が付されるのである。

1.4 夢というユートピア

ここで1.1における夢(sueño)の語源的考察で示した、その語義が示す生理現象と内的な理想との間にある共通点が見えてくる。

それはユートピア性である。「理想」の類義語としての夢はもちろん、睡眠時の夢にもそのような要素が含意されているのだ。それには somniō (夢を見る) が持つ「うっとりする」という語義が重要である。ラテン語の語感においては、我々が「夢を見る」感覚と「うっとり」する感覚、すなわち、内的な理想に恍惚とする感覚に類似性がもたらされているのだ。

夢という場は、カイヨワの議論を参照すると、自分が王として君臨し何にも煩わされないエデンともなりうる場なのであった。しかし、この楽園は夢の中にのみある非現実なのであって、我々の生において実現することは決してない。

とはいえ忘れてはならないのは夢と現実の間にある境界線は非常にあいまいなものであるということ、それゆえに夢の中で現実として現れた楽園に対して感じたほんとうらしさの感を目覚めた後にも思い出すことができるのである。思うにこの想起の時に我々は現実の世界でも夢に魅了されるのである。

先に言及したが、ロジャーも本編でよく夢を見る。それが悪夢であることもあるが、彼が見る夢の多くは、面白いことに、彼の理想が実現しているのである。例えば九章ではこのような夢を見ていた。彼はアマゾンの密林の中にいて、往年悩まされていた持病や疾病がすっかりなくなっていた。しかも彼は若返っておりイルカのようにすいすいとアマゾン川を泳ぎ、最後にはアイルランドへの思いを馳せる夢¹⁸である。

また十章の冒頭では、自身の過激化したナショナリズムのゆえに絶縁したハーバート・ウォードとその妻サリータが、イースター蜂起に参加しロジャーと共にアイルランド独立のために戦っている夢を見ていた¹⁹。

このような人間を魅了する力と非実現性を備えているという意味で夢(sueño)には理想や憧憬としての意味が与えられたのだろうし、そこにユートピア性が芽生えるのである。

ここで注意を払わねばならないのは、ユートピア性を包含することとは同時に未完結性をも包含していることを意味しているということである。ユートピアとは本質的に我々各人の理想が実現している場であるため、その片鱗をひとたび感じたなら我々はすっかり魅了されてしまいその実現を望まないわけにはいかなくなるものである。

だが反面ユートピアという語は「無何有郷」、すなわち実現不可能な理想郷という意味を語義として持っているのである。そうすると、近づこうとしても近づいた分だけ離れていく性質を持つものでもあるといえるのではないか。そうであるなら、ユートピア性を分有するものは不可避免的に未完結性を帯びてしまうのである。

このふたつの要素を含有していることは、サバテールの思想における「幸福」との連関を感じさせるものであるが、これについては3.3 幸福と夢における議論の中へと譲ることにする。

2. ロジャーと見果てぬ夢

2.1 ナショナリズム

次に、ロジャーが抱いていた「見果てぬ夢」についての考察を行う。本稿の序文で示したように、彼の夢はナショナリズム、セクシュアリティそして「真の愛」の三要素を含む「自己の実現」として表現されていると筆者は考えている。思うに、『ケルト人の夢』の中で描かれるロジャーは、常に「わたし」にまつわる問いの中にさらされながらその生を駆け抜けた

人物であった。

第一の要素はナショナリズムである。これは物語序盤では未開の地に住む人々に進歩をもたらす帝国の啓蒙者として現れている²⁰。ロジャーは憧憬の念を抱いていたスタンリー探検隊の実情を目にし、それに失望した後もこの原住民らの支援者としての啓蒙家として活動した。

だがこの帝国側へのシンパシーはコンゴにおける原住民搾取の構造との対決を通じてすっかり消え失せ、その構造のなかに郷土アイルランドと大英帝国との関係を見出していった。彼は「コンゴと同じくアイルランドも植民地ではないか？」²¹と自問し、アリス・ストップフォード・グリーンとの交流を深める中で様々なナショナリストと出会い、自分が帝国から搾取されている国の市民であることを確信していく。それを契機に「僕はアイルランド人なんだ」²²という意識を強め、ゲール語を学び、アイルランド古来の文化や習慣などとの同化を試みた。

そしてアマゾン編でプトゥマヨにおける原住民搾取の構造との戦いに身を投じるときには、アイルランド人の精神がアマゾンの先住民らと同じように植民地化によってくじかれることを許してはならず一気に行動せねばならない²³と考えるようになった。この危機感から、ときおりその狂信さを自覚しながらも²⁴、最終的にロジャーは急進的なナショナリズムへと向かっていった。

ここで注目せねばならないのは、友人のハーバートが急進的なナショナリストと化したロジャーに対して「ケルト人」というあだ名をつけたことである²⁵。それをロジャーは気に入り、アリスはそうロジャーを呼んでいた。「アイルランド人」そして「ケルト人」という名前はロジャーのナショナリストとしての側面における自己実現の営みに重要な役割を果たしているだろう。

だがこれには加えて指摘せねばならない点が一つある。それは、アリスたちナショナリストのサロンに出入りしていたアイルランド人作家ウィリアム・バトラー・イエイツがロジャーに対して「世界市民」の呼称を与えたことである。これは「どこにも帰属しないこと」と同時に「あらゆるところに帰属していること」を表す呼称でロジャーはその地位を自慢に思っていた²⁶。ロジャーは世界市民が持つ特権として、一つの場所にとどまり続けた人が知らぬ自由を得てきたと考えていた。だが同時にそう言い聞かせてきたと彼は言う。なぜなら、彼は自分が「この世の追放者」であるという感覚を、幼き頃に死んだ母にまといわされた孤児性によって持ち続けていたからである²⁷。

ロジャーはアイルランド、イギリス、アフリカ、ブラジル、そしてイキトスやプトゥマヨに至るまでそれらの地で絶えずこの孤児性を、つまり追放者の感覚を覚えていた。この感覚は彼の見果てぬ夢を構成する第二、第三の要素にも深くかわるものである。ゆえに、この点については残りの二要素を指摘したのちに再び論じることとしよう。

2.2 セクシュアリティ

第二のものは、彼のセクシュアリティに関する要素である。これは思うに、ロジャーが禁欲主義の清教徒である厳格な父に育てられたことと、当時の社会情勢に端を発する。まずキリスト教自体が性的マイノリティに不寛容な側面をもっているし、その上で、ロジャーの父はピューリタンの慣習に忠実²⁸であった。しかもロジャーが生きた19世紀から20世紀前半にかけてのイギリスでは刑法改正法（Criminal Law Amendment Act）によって同性愛は犯罪として扱われていた²⁹。

こういった状況がロジャーの性自認に枷を嵌めていたことは間違いない。各人の性自認の問題は自己実現において重要な点であるのは疑いない上、現代の社会でもそういった問題を含むジェンダーに関する議論というのは我々が避けては通れない重要性を持っている。

こういった点から物語においてロジャーは性自認の面で強い抑圧と追放感を感じていたことが推論できる。本編にもそのような抑圧の感を思わせる箇所がある。それはロジャーが自身の性体験について回想する第十一章の場面に表れている。

不安や怯え、何か違反しているという印象をプラスして自分を最も興奮させるのが、若い娘ではなく若い男の美しさであると意識するようになったのはいつだったろうか？ そうだ、アフリカで。アフリカ大陸に足を踏み入れる前までは、彼に対するピューリタンの教育、父方と母方の親戚筋の厳しく伝統的で保守的な習慣が、その種の刺激のいかなる兆しをも、それがまだ萌芽する前に抑圧してしまっていた。それは、同性間に生じるほんのわずかな性的関心の疑いも忌まわしい逸脱とされ、弁明も情状酌量も伴わない犯罪行為、罪として、法と宗教によってまさしくとがめられる状況に忠実なものであった³⁰

これはまさに父から受けた清教徒的教育や当時の社会が共有していたジェンダーに関する偏見による同調圧力を、ロジャーが感じ取っていたとする表現であろう。この文章の後にロジャーの初めての性体験についての描写がある。そこで彼はその体験を経て自分を偽っていたことに気づき、自分の全存在が揺らぎ燃えさかる松明のようなようになった感覚を覚え、自責の念を感じながらも以前のようなお利巧さんではいられなくなったことがわかったのだ³¹。

男性の肉体に対して抱いていた官能的な情欲を認識したときロジャーの生活は一変した。それは彼にとって喜ばしいことでもあったが、同時に当時の抑圧的状况によって、それを秘匿せねばならないことと苦悩、秘密の露呈への恐怖があった³²。

しかし、この物語の中のロジャーは自分のセクシュアリティを恥じていたのではない。なぜなら性的な体験の中で、自分の生活が驚くべき歓びの瞬間で満たされる感覚をも持っていたからである。「コンゴ・レポート」の執筆に忙殺されていた期間が終わり本国への帰途で寄ったルワンダで久しぶりに情欲を感じたとき「また自分に戻ったんだ」³³と感じたのである。

それゆえ、筆者は「ホモセクシュアルとしての自己実現」も彼の見果てぬ夢の一要素を構成していると考えたのである。

2.3 「真の愛」

第三の要素は「真の愛」である。これは第二の要素であるセクシュアリティと深くかかわるものである。この「真の愛」という要素をロジャーの夢に含めたのは、彼がパラード・マッタ夫妻に面会した後に感じたうつ状態、夫妻の関係を「真の愛、分かち合う愛」³⁴と言って羨んだことから着想を得た。

ここで注意したいのは、「真の愛」という語は、所謂「性愛」などを全く含まないプラトニックな精神的絆のみを示すのではないということだ。なぜなら、もし、「真の愛」がこの絆のみを示すなら、アリスやジー、ハーバート（最終的に関係は破綻したが）らがいたことで、ダ・マッタ夫妻への羨望³⁵を感じることはなかっただろうからだ。

ゆえにロジャーが思う真の愛とはそのような精神的絆に加えて性的な関係をも含んでいるのだと言える。だが、加えて指摘せねばならないのは、この愛に含まれる性的な要素というのは「繁殖が可能な異

れているということだ。

アイヴィント・アドラー・クリスティンセンはロジャーをイギリス当局へと売った裏切り者である。だがロジャーは彼との間に真の愛を予感していた。その様子は本編十四章のドイツへの旅にアイヴィントを伴わせる場面で次のように描写されている。

この若者によって、彼の生活に若さと夢が、そして「…」愛が流れ込んだ。かつてなかったことだった。まちをぶらつきながらたまさか冒険を試みたことはある。相手は、「…」ほとんど即座に名前を忘れてしまうような人物のこともあれば、日記の中で彼の創造や欲望、孤独が作り出す幻影のこともあった。だが、二人だけのときには《美貌のヴァイキング》と呼んでいた相手とは、日を追うごとに、ついに快樂を超えた愛情関係を築くことができたと感じていた。それは長続きし、性的指向が強いてきた孤独から自分を解放してくれそうだった³⁶

バルガス＝リョサの表現がセクシュアルマイノリティに配慮できているものであるかは本稿では議論しない。しかし、同性愛が犯罪であった当時の時代背景を考慮すると、ホモセクシュアルであるがゆえに、単なる友人愛や一時的な性関係でなく、精神的にも肉体的にも深くかかわりあい互いを愛するパートナーとしての関係を探すことの困難さは、現代とは比にならないほどのものであったろう——当然未だ完全になくなったとは言いきれないのだが——。

それゆえに互いに愛し、黙っていても通じ合い、子を育む微笑みが交わされるやさしさを公然と表現できるダ・マッタ夫妻と自分をロジャーは比較し孤独感——追放者の感——にさいなまれてしまったのである。

いま議論した「真の愛」がなぜロジャーの夢、すなわち自己実現の夢に含まれるのかというと、愛とはその関係の当事者の本性が現れる場だからである。愛についてサバテールは、人間の間における諸々の関係（あるときは生産的でまたある時は闘争的であるコミュニケーション）すべては、他者とのコミュニケーションとしての愛によって自己を識別することで初めて象徴化されるもの³⁷だと指摘しているし、彼が影響を受けたアリストテレスは「愛する相手の「ひととなり」（エートス）ゆえに」³⁸愛する相互応酬的な関係こそが愛（フィリア）であるとしている。

すなわち、愛には自分が愛する相手の自己と相手が愛する自分の自己のその双方が現れていなければならないのである。こういったことを踏まえるとロジャーはセクシュアリティの側面もすべてひっくるめたロジャー自身であるがゆえに愛してくれるような、生涯的なパートナーとして相互的にかかわりあえる関係を望んでいたといえるのではないか。

こういったことから筆者はこの「真の愛」がロジャーの夢に含まれる重要な要素であると考えたのである。

さて、これまでロジャーの見果てぬ夢についてみてきたが、それは「ナショナリズム」、「セクシュアリティ」、「真の愛」といった三つの要素を包含するものであった。ここで筆者が指摘したいのは、これら三つすべてに「この世の追放者」というロジャーの感覚が潜んでいるということである。

思うに、自己とは様々な関係の中に現れ出るものである。それをレヴィナスは他者の経験によって現れる〈顔〉(visage) だと言ったし、サバテールもその関係の中から自我が識別されると指摘している。これらの関係はすべてが固定的なものではなく当然揺らぎがあり、つねに亀裂を持っているものである。すなわち、関係の形が変わったり、廃棄されたり、新た

な関係が生まれる余地が残されているのである。

ゆえに我々の自己というの揺らぎを持ったものであるのだが、ロジャーの自己が持つ揺らぎは我々のそれと比べてさらに深刻なのである。厳密に言えば、ナショナリティ、セクシュアリティ、真の愛という点において、そのような関係の中にすら入れなかったという認識こそが彼に「この世の追放者」(孤児性)という感覚をもたらし、孤独感を深刻化したのだと考える。

それゆえ、その感覚をぬぐうために、物語本編のロジャーは「ナショナリズム」、「セクシュアリティ」、「真の愛」といった三つの要素を包含する自己の実現の夢を持っていたのではないかと筆者は考える。

しかし、この世から追放された流民の感覚はロジャーだけのものなのだろうか。この感覚は読者の我々や著者のバルガス＝リョサも所有しているのではないだろうか。次の章ではこの世の追放者の感覚を中心にサバテールやウナムーノといった現代スペイン思想家たちの考えを手掛かりに考察してみよう。

3. Yo (わたし) をめぐる問い

3.1 わたしという追放者

先に追放者の感覚について指摘したが、その感覚が言及されたのは『ケルト人の夢』第十三章の死刑宣告直前のロジャーが『キリストにならいて』における次のような説教に共感した後である。

時としていろいろな悩みや意に反する事があるのも、私たちにあってよいことである、なぜかというと、それはしばしば人に、自分がこの世では流人の身であることを悟らせ、自分の望みをこの世のものかにおいてはならぬことを想起させるからである³⁹

どこかに帰属していると感じたことがない——世界市民的要素として誇っていた——のはこの流民の状態が人間の本来的な在り方だからだとロジャーはこの場面で納得した。そして筆者は我々が本来的にこの世の追放者であるという命題はある意味で正確であると考えている。

我々はたびたびこの追放者の感覚を味わっている。それは例えば、自分の住む地域や国、コミュニティへの不信感から帰属意識が希薄になった瞬間などもそうであるが、友人関係や家族関係、社会における人間関係などで他者との衝突や相互理解の失敗などに起因する孤独感を感じる時などがまさにその瞬間であろう。

だが、ケンピスやロジャーの言うように本来的に我々人間がこの世の追放者であるなら、なぜ世俗の世界での自己実現にとらわれるというのだろうか。思うにそれは、とあるスペイン思想家の考えを手掛かりにすると理解できる。

その思想家とは、ミゲル・デ・ウナムーノ⁴⁰である。彼は自己(yo)についての考察を『三つの模範小説と序』においてオリヴァー・ウェンデル・ホームズの「三人のジョンと三人のトーマス」という考え紹介しながら行った。

ウナムーノはジョンをフアンとしながら、ウェンデル・ホームズの考えを次のように示している。

(-)真のフアン：神によってのみ知られている。

(二)フアンが抱いている観念的フアン：決して真のフアンとはならないし、ときおりそれからかけ離れてしまう。

(三)トーマスが抱いている観念的フアン：決して真のフアンとならないしフアンが考えているフアンにもなり得ない。ときおりその双方からかけ離れてしまう⁴¹

そしてウナムーノは、この三つの自己の現れ方に「こうなりたいと欲する自己」を加えるべきであり、その自己こそ真に実在的であると主張する。

つまりわたしは、神にたいしてある自分 […] や、他人にたいしてある自分や、自分で考えている自分のほかに、かくありたいと欲している自分があると主張するのだ。また、この自分、かくありたいと欲している自分こそ、彼のうちで、彼の胸中であって、創造的であり、かつまた真に実在的な自分であるということ。 ⁴²

ウナムーノは私がこうありたいと欲するところの自分こそ最も実在的な自己なのであると考えている。さらに言えば、存在したくないと欲するひと——存在することを欲しないこととは根本的に異なる。つまり、「存在しない」という自分の在り方を欲しているということなのである——もまたそれと同じ位置にあるのであって、この二種の人間は創造者であり最も本体的な人間なのである。続けてウナムーノはこのように指摘する。

ただ問題は、カント流に言えば、本体的と呼びうるであろうこの人間、意志的かつイデー的な——イデー＝意志、つまり力の——この人間が、現象的、表面的、理性的な世界に、いわゆる実在論者にとつての世界に、生きなければならないことだ。人間は夢であるところの生を夢見なければならない。で、ここから、そのような実在的な人間相互の衝突から、悲劇や喜劇や小説やニボーラが生まれるのである ⁴³

これらを踏まえて筆者が指摘したいのは、ウナムーノに即して考えると最も実在的な人間は現象界にも理性界すなわち夢の次元にも生きねばならないという意味で、最も実在的な人間だということである。それゆえ、ケンピスやロジャーがいかなるこの世の望みは達成されずあの世でのみそれが成就すると考えても、我々は自己の実現を求めてしまうのである。

しかしここで筆者は、この最も実在的な人間というのは本質的に多面的なのではないかも主張したい。ウナムーノ曰く、その実在的な人間同士の衝突、すなわち関係の間にもろもろの物語が生まれるのだという。ロジャーの見果てぬ夢を振り返れば、そこにはナショナリズム、セクシュアリティ、真の愛の三つの要素があるのであったが、それぞれの要素におけるロジャーがなりたいと欲するロジャー自身の姿は異なるのではないだろうか。

り、決して固定的に現象しないのだ。すなわち、それぞれの関係において表象されうるようありたいと欲するところの自己を十全に実現する力——更新の余白としての揺らぎなしに、完成した事故を実現する力——などというものは、我々人間にはもたらされていないのである。

では、この十全な自己実現を行える者は誰もいないということになるのだろうか。否、実はいるのである。それは「英雄」である。この者のみが、この不可能な任務を実現できるのである。

3.2 英雄と自己実現の夢

サバテールは英雄を力と卓越性を象徴する徳のパラダイムであると考えている⁴⁴。そしてこの力は「自己を維持し、自己の基礎を築き、己の立場を明確にし、そして自分の性格に没頭する」⁴⁵という自己実現に十分な力なのである。

ウナムーノは『ドン・キホーテとサンチョの生涯』のなかで「わしは自分が何者であるか、よく存じておる」⁴⁶というドン・キホーテの言葉に関して、ただ英雄だけが自信をもってその言葉を発することができ⁴⁷、かつその言葉は「ただ「わたしは自分がどういう者でありたいかを承知しているのだ！」と言っているにすぎない」⁴⁸と言っている。

ふたりの哲学者による英雄の議論を踏まえて考えると、最も実在的な人間的存在である「こうありたいと欲する」ところの存在を十分に実在させる力を持つのは英雄だけだということと言えるだろう。

すなわち、己が何者であるか——何者でありたいのか——をわかっており、自己の基礎を築きそれを維持する力、つまり十全な自己実現を行う力を持っている者が英雄と呼ばれるのである。

我々人間はこのような力をもたらされていない。それゆえ、どうあがいても英雄がやるような十全な自己実現など夢のまた夢なのである。それもそうだろう英雄(ἥρως)は元来「半人半神」を表す語で、神と人間の間に生まれたために神の力——超越的な力——を分有している者を示しているのだから。

しかし、だからと言って我々は「自己実現の夢」をあきらめることはない。いやむしろあきらめることが不可能であると言った方がいいだろう。なぜなら、先に示したように自己実現とは夢の一種なのであり、夢は我々を魅了するからであり、加えて言うと、どんなひとにもなりたくないと思ふ

死すべき存在にすぎず、いつかは大地に食われてしまう存在である。ところが君がそうありたいと望む君は、宇宙の意識である神のうちにおける君のアイデアである。つまりそれは、君が時間と空間におけるその現れであるところの神のアイデアなのである。そして君がそうでありたいと望んでいる存在へ向かっての君のノスタルジックな衝動は、君を天の家へとひきつける望郷の念に他ならない。まさに人間以上のものたらんと欲するときだけ、人間は本来的な人間なのである⁴⁹

最も実在的な人間だとされた「こうありたいと欲するところの自分」は現象界には現れることのできないアイデアなのである。つまり、本質的に最も実在的な人間である多面体としての自己は知性界に位置するものなのである。それゆえ、この夢はこの世では実現できないものなのであり、それを実現できない我々は追放者となってしまうのである。そしてこれを実現できるのは超越的な神の力を分有する英雄のみなのである。

ワが言ったように理想としての夢は欲望と一致するものだからであり、さらにそれが熱望されなくなったらその瞬間に欲望たりえなくなりユートピア性も欠落するからである。

ではいま議論しているところの夢と幸福は同一のものであると言えるのだろうか。思うに、その答えは否である。なぜなら、サバテールの言う幸福には非理性的なものが入る余地はないが、夢はしばしば非理性的要素を包含してしまう点で異なっているからである。

サバテールの幸福は、夢と近縁であるとはいえ、非理性的な要素を包含することはない。正確に言えば、ひとたび非理性的な要素が包含されれば、それは「幸福」それ自身足り得なくなるのである。なぜなら、サバテールが理想とする「人間としてのわたしの生」は理性的に構築されることが前提されているからだ⁵³。

これをロジャーに適用すると、コンゴやアマゾンにおける原住民搾取の構造に戦いを挑む場面ではロジャーはハムレット的人間であり、それを追う読者はドン・キホーテ的人間となっている。他方ロジャーのナショナリズムが急進化し「ケルト人の夢」に呑まれているとき彼はドン・キホーテ的人間となり、読者はハムレット的な分析的態度をとるのである。

以上のことから『ケルト人の夢』におけるロジャー・ケイスメントは訳者の野谷文昭も言うように、ドン・キホーテ的な気質を持っている人物として描かれていると言っているだろう。それゆえ筆者はラ・マンチャの遍歴の騎士とアイルランドの英雄との間につながりを見出さずにはいらなかったのである。

本稿ではウナムーノやサバテールといったスペイン思想家たちの思想とカイヨワの夢に関する議論を手掛かりに、「夢 (sueño)」それ自体とロジャー・ケイスメントの見果てぬ夢について考察した。「夢 (sueño)」という言葉には二つの意味の奇妙な同居があり、ロジャーの夢は「自己の実現」という形で物語に表れていた。

そしてこの夢はロジャーだけでなくすべてのひとが抱く、決してたどり着くことのない、「見果てぬ夢」なのである。

この種の夢はフェルナンド・サバテールの幸福の概念と類似していて、そのうちに「熱望され続ける」という要素を含んでいる。だがしかし、夢はときおり非理性的なものをそのなかに含んでしまい、夢見の当事者の身を亡ぼす。

ウナムーノが言ったように「われわれは、これまで現実にあった自分によってではなく、かくありたいと願ってきた自分によって、救われもし、破滅しもする」⁵⁹のである。

最後に、「夢 (sueño)」がなぜ実現不可能でありながらも我々を魅了し続けるのかを言い表しているように思う、サバテールによる幸福の考察を引用して本考察を終わる。

幸福によって引き起こることというのはおそらく、我々が幸福とは共存できないということである。

幸福とは私がない、もしくは未だ辿り着けていない、たまたしくは既に後にしてしまったところで煌めく彼方のものなのだ⁶⁰

参考文献一覧

〈外国語文献〉

Dudgeon, Jeffrey, *Roger Casement: The Black Diaries with a Study of his Background, Sexuality, and Irish Political Life*, Belfast, Belfast Press, 2022

Nogueroles Jové, Marta, *Fernando Savater: biografía intelectual de un “joven filósofo”*, Madrid, ENDYMION, 2013

Savater, Fernando, *Diccionario filosófico*, Barcelona, Planeta, 1995

——, *El contenido de la Felicidad*, Madrid, El País, 1986

——, *Ética para Amador*, Barcelona, Ariel, 1991

——, *La tarea del héroe*, Barcelona, Ariel, 1981

——, *Mira por dónde: Autobiografía razonada*, Madrid, Taurus, 2003

Unamuno, Miguel de, *Del sentimiento trágico de la vida*, Buenos Aires, Editorial Losada, 1964 (1913)

——, *Tres Novelas Ejemplares y un Prólogo*, Buenos Aires, Espasa-Calpe, 1939

——, *Vida de Don Quijote y Sancho*, Madrid, Espasa-Calpe, 1938

〈日本語文献〉

アリストテレス『ニコマコス倫理学 上・下』、高田三郎訳、岩波書店、1971・1973年

今福龍太『ボルヘス『伝奇集』——迷宮の夢見る虎』、慶応義塾大学出版会、2019年

ウナムーノ、ミゲル・デ『虚構と現実』（ウナムーノ著作集4）、高見英一・杉山武・鼓直訳、法政大学出版局、1974年

——『生の悲劇的感情』（ウナムーノ著作集3）、神吉敬三・佐々木孝訳、法政大学出版局、1975年

——『ドン・キホーテとサンチョの生涯』（ウナムーノ著作集2）、A マタイス・佐々木孝訳、法政大学出版局、1972年

カイヨワ、ロジェ『夢の現象学』、金井裕訳、思潮社、1986年

ケンピス、トマス・ア『キリストにならいて』、大沢章・呉茂一訳、岩波書店、1960年

児玉聡『功利と直観——英米倫理思想史入門——』、勁草書房、2010年

佐々木孝『情熱の哲学——ウナムーノと「生」の闘い——』、法政大学出版局、2018年

サバテール、フェルナンド『父が子に語る人間の生き方—エチカの探究—』、竹田篤司訳、河出書房新社、1996年

ショーペンハウアー、アルトゥール『意志と表象としての世界 I』、西尾幹二訳、2004年

スピノザ『スピノザ エチカ 上・下』、畠中尚志訳、岩波書店、1951年

セルバンテス、ミゲル・デ『ドン・キホーテ 前編・後編』、牛島信明訳、岩波文庫、2001年

ドゥルーズ、ジル『スピノザ——実践の哲学——』、鈴木雅大訳、平凡社、2002年

バタイユ、ジョルジュ『内的体験』、出口裕弘訳、平凡社、1998年

——『有罪者』、江澤健一郎訳、河出書房新社、2017年

バルガス＝リョサ、マリオ『ケルト人の夢』、野谷文昭訳、岩波書店、2021年

ボルヘス、ホルヘ・ルイス『創造者』、鼓直訳、岩波書店、2009年

——『伝奇集』、鼓直訳、岩波書店、1993年

——『夢の本』、堀内研二訳、国書刊行会、1992年

マエストゥ、ラミーロ・デ『愛の象徴ドン・キホーテ』、吉田秀太郎訳、大学書林語学文庫、1985年

マタイス、アンセルモ・マシア、フアン『ウナムーノ、オルテガの研究』、以文社、1975年

ミル、J.S.『功利主義論』、伊原吉之助訳、関嘉彦他編、『世界の名著』第38巻、中央公論社、1967

年、460-528 頁

レヴィナス、エマニュエル『全体性と無限』、合田正人訳、国文社、1989 年
〈インターネット文献〉

野田恵子、2022 年 12 月 30 日 最終閲覧 「イギリスにおける「同性愛」の脱犯罪化とその歴史的
背景——刑法改正法と性犯罪法の狭間で——」、

https://www.jstage.jst.go.jp/article/genderhistory/2/0/2_0_63/_pdf/-char/ja

註

- ¹ マリオ・バルガス＝リョサ：ペルーの小説家、代表作は『緑の家』。1936 年に生まれる。2010 年にノーベル賞を受賞。
- ² ロジャー・ケイメント：1864 年アイルランドのダブリンに生まれる。大英帝国の外交官でありながら人権活動家。外交官としての赴任先であるコンゴとアマゾンにおける原住民搾取を告発した。晩年はアイルランド独立のため活動し、1916 年に反逆罪で逮捕。同年処刑された。
- ³ フェルナンド・サバテル：現代スペインの哲学・倫理学者。代表作は *Ética para Amador* (『愛する子へ贈る倫理』) と *La tarea del héroe* (『英雄の責務』)
- ⁴ 面白いことにロシア語ではこの語は сон (睡眠時の夢) と мечта (理想としての夢) の二つに分けられている。英語の dream は古ノルド語の draumr から由来し古英語 dream (喜び、音楽) も同系統であるとされる。おそらく古英語の時点で生理現象を指す意味と理想としての欲望の意味の同居が起こっている。また独語 Traum も同じ語源である。
日本語の「夢」という単語に関しては語源が定まっておらず諸説ある。いくつかの辞書で共通しているのは「寝て物を見る」という意味を持つ「寝目 (イメ)」が転じて「ゆめ」となったとする説である。また「夢」という漢字が持つ字義としては「暗い、明らかではない、ぼんやりとした」といったものが挙げられる。
- ⁵ ロジェ・カイヨワ：1913 年フランスのランスに生まれる。文芸評論、社会学、哲学など幅広い分野で執筆活動を行った。
- ⁶ すなわち、因果性である。サバテルに影響を及ぼしているショーペンハウアーは、時間に関係するものはアイデアの現象のみに関わるのであってアイデアそのものにはかかわらないと述べている。彼の哲学において現象するものは、時間性と空間性による因果性を用いながら分析的に明証を与えることができるものである。(『意志と表象としての世界 I』357 頁参照。)
- ⁷ バルガス＝リョサ、マリオ『ケルト人の夢』、野谷文昭訳、岩波書店、2021 年、381、408 頁。
- ⁸ Savater, Fernando, *El contenido de la Felicidad*, Madrid, El País, 1986, p.82.
- ⁹ カイヨワ、ロジェ『夢の現象学』、金井裕訳、思潮社、1986 年、54 頁。
- ¹⁰ 同上、82 頁。
- ¹¹ バタイユ、ジョルジュ『有罪者』、江澤健一郎訳、河出書房新社、2017 年、41 頁。
- ¹² 「夢を見ている人が夢を夢として認めるのはただ目覚めた瞬間においてのみである。夢を見ている時にはその人は夢を必ず現実とみなしている」、カイヨワ、前掲書、41 頁。
- ¹³ 「フィクションという言葉は、これらの真実の見せかけの性質——これらは故意的に見せかけのものであることを運命づけられている——と真実の創意にあふれた本質——我々はそれを芸術的な本質と言おう——とを存分に示すものである。フィクションは、客観的な実在性の直接的かつ必然的な発端であると受け取られるのではなく、わざとらしくもある程度規定された捏造として受け止められ [...] 我々を取り囲む未知のことによる執拗な追跡に対し我々が進歩を以てフィクションを介して返答する限り、ただ唯一の真実である」, Savater, Fernando, op.cit., 1986, p.44.
- ¹⁴ サバテルは、絶対的真実 (真理) は閉鎖的で非本質的な真実の在り方だと考えている。対してフィクションによって表象される更新可能な真実、つまり、客観的な証明がされ得ない真実こそ、より本質的な開けた真実の在り方だと認識しているのである。
- ¹⁵ 今福龍太『ボルヘス『伝奇集』——迷宮の夢見る虎』、慶応義塾大学出版会、2019 年、11 頁。
- ¹⁶ カイヨワ、前掲書、82 頁。
- ¹⁷ Savater, Fernando, op.cit., 1986, p.87.
- ¹⁸ バルガス＝リョサ、前掲書、219-20 頁。

- ¹⁹ 同上、381 頁。
- ²⁰ 『ケルト人の夢』56 頁において、SEE を辞したのちに参加したスタンリーが行っていた鉄道施工事業は「肉体的には多大な努力を要したものの、彼にアフリカに来たときの夢を取り戻させてくれた」とロジャーは振り返っている。
- ²¹ 同上、114 頁。
- ²² 同上、128 頁。
- ²³ 同上、274 頁。
- ²⁴ 同上、434 頁。
- ²⁵ 同上、26 頁。
- ²⁶ 同上、418 頁。
- ²⁷ 同上、417-8 頁。
- ²⁸ 同上、11 頁。
- ²⁹ この改正法は 1885 年に成立し、1967 年に性犯罪法が改正されるまで男性同士の密接な関係が犯罪となる状態が続いていた。
- ³⁰ 同上、312 頁。
- ³¹ 同上、314 頁。
- ³² 同上、419-20 頁。
- ³³ 同上、117 頁。
- ³⁴ 同上、336 頁。
- ³⁵ 同上、同頁。
- ³⁶ 同上、454 頁。
- ³⁷ Savater, Fernando, op.cit., 1986, p.137.
- ³⁸ アリストテレス『ニコマコス倫理学 下』、高田三郎訳、岩波書店、1973 年、91 頁。
- ³⁹ ケンピス、トマス・ア『キリストにならいて』、大沢章・呉茂一訳、岩波書店、1960 年、29 頁。
- ⁴⁰ ミゲル・デ・ウナムーノ：1864 年スペインはバスク地方のビルバオに生まれる。実存主義の先駆者としても評価される。主著は『生の悲劇的感情』。
- ⁴¹ Unamuno, Miguel de, *Tres Novelas Ejemplares y un Prólogo*, Buenos Aires, Espasa-Calpe, 1939, p.13
- ⁴² ウナムーノ、ミゲル・デ『虚構と現実』（ウナムーノ著作集 4）、高見英一・杉山武・鼓直訳、法政大学出版局、1974 年、246 頁。
- ⁴³ 同上、248 頁。
- ⁴⁴ Savater, Fernando, *La tarea del héroe*, Barcelona, Ariel, 1981, p.136. ; Savater, Fernando, op.cit., 1986, p.71.
- ⁴⁵ Ibid., p.63.
- ⁴⁶ セルバンテス、ミゲル・デ『ドン・キホーテ 前編(-)』、牛島信明訳、岩波文庫、2001 年、107 頁。
- ⁴⁷ ウナムーノ、ミゲル・デ『ドン・キホーテとサンチョの生涯』（ウナムーノ著作集 2）、A マタイス・佐々木孝訳、法政大学出版局、1972 年、54 頁。
- ⁴⁸ 同上、55 頁。
- ⁴⁹ ウナムーノ、ドン・キホーテ、55 頁。
- ⁵⁰ 「幸福という語と矛盾せずにとって代わることができる、唯一の迂言法の基礎を生み出すこととは「我々が欲すること」なのである。我々が欲することを我々は幸福と呼ぶのだ」Savater, Fernando, op.cit., 1986, p.12.
- ⁵¹ Ibid., p.138.
- ⁵² Ibid., p.12.
- ⁵³ 『幸福の中身』、p135 以降を参照。
- ⁵⁴ バルガス＝リョサ、216、298 頁。
- ⁵⁵ 同上、298 頁。
- ⁵⁶ マエストゥ、ラミーロ・デ『愛の象徴ドン・キホーテ』、吉田秀太郎訳、大学書林語学文庫、1985 年、15 頁。
- ⁵⁷ 同上、21 頁。
- ⁵⁸ 同上、33 頁。
- ⁵⁹ ウナムーノ、虚構、246 頁。
- ⁶⁰ Savater, Fernando, op.cit., 1986, p.10.

フィクションと現実の狭間でみる「夢」——「全体小説」としての『ケルト人の夢』

とマリオ・バルガス＝リョサ——

藤井健太郎

マリオ・バルガス＝リョサは、作家としての長きにわたるキャリアのなかで、多くの変遷をたどってきた。エフライン・クリスタルは、この変遷を、1960年代以降の、「アンガジュマン」の作家として、現実に対する異議申し立てを行い、現実を変革するものとしての小説を志向した時期(『都会と犬ども』『緑の家』『ラ・カテドラルでの対話』など)、1980年代以降の、現実には実現し得ない理想を、あくまでも虚構としての小説において想像することを志向した時期(『世界終末戦争』など)、そして、大統領選出馬を経た1990年代以降の、そのような理想を現実において必ず待ち受けている失望というものを描く様になった時期という三段階に大別しているⁱ。

こうした変遷において『ケルト人の夢』を捉える場合に注目しておきたいのは、本作が、1960-70年代にバルガス＝リョサが志向した「全体小説」を思わせる様なスケールの大きな作品でありながら、いくつかの点で、それとは決定的に異なっていることである。『ティラン・ロ・ブラン』、『ボヴァリー夫人』、『百年の孤独』などに関する文芸評論で展開され、『緑の家』、『ラ・カテドラルでの対話』といった作品において体現されている「全体小説」の美学とは、マーク・D・アンダーソンによれば、ひとつの自律した世界としての小説、また、現実に対して不調和を生じさせるような、様々な矛盾を内包したもうひとつの現実としての小説への志向であったⁱⁱ。そして、その際に、「小説家は虚構の世界において『神を演じる』」のだが、作者のイデオロギーが置換された虚構世界がいったん組み立てられてしまえば、作者はそこに一切関与しないものとして捉えられているⁱⁱⁱ。

こうした1960-70年代のバルガス＝リョサが志向した「全体小説」、とりわけ『緑の家』、『ラ・カテドラルでの対話』、そしてガルシア＝マルケス『百年の孤独』と『ケルト人の夢』とを比較すると、前者の小説群が円環的な構造を持っているのに対して、『ケルト人の夢』は、ロジャー・ケイスメントの死によって終わりを迎えるという直線的な構造を持っている。より正確に言う、『ケルト人の夢』においては、断片的に反復して過去が回想されること(これは、しばしばケイスメントがみる「夢」という形をとる)によって、直線的な時間に対する円環的な時間が描かれるのだが、とりわけ、ケイスメントの死という歴史的事実に向かって物語が急速に進行していく第3章「アイルランド」以降、そのような円環的な時間は、ケイスメントの処刑へ向かう歴史の流れという直線的な時間へと回収されていくこととなる。つまり、『ケルト人の夢』で描かれるのは、直線的な時間に対する円環的な時間の敗北であり、その意味で、歴史的現実に対するフィクションの敗北であるとも言えるだろう。

もう一点、1960-70年代に志向された「全体小説」と『ケルト人の夢』を比較して興味深いのは、登場人物としてのケイスメントの造型についてである。

『都会と犬ども』、『緑の家』、『ラ・カテドラルの対話』といった作品においては、断片的に描かれる登場人物の姿が、時に相矛盾していて、統合されたひとりの人物としての像を結ばな

い。つまり、これらの作品群では、登場人物の姿が、時系列を入れ替えながら、かつ断片的に描かれるのだが、ある時点でのある人物の姿は、別の時点でのその人物とは全く別人であるようにすら思われることがしばしばある。

ケイスメントに関しても、バルガス＝リョサは、彼について興味深いのは、多くの側面を持った矛盾した人物であることだとインタビューで語ってはいる^{iv}。バルガス＝リョサのケイスメントという人物に対するこうした捉え方は、エピグラフに引かれているエンリケ・ロドーの言葉からも窺て取れるだろう。しかし、そのような矛盾を抱えた実在の人物としてのケイスメントに対して、バルガス＝リョサはフィクション上の操作を行うことで、様々な要素が削ぎ落とされた上での、普遍的な人間の本質のようなものを登場人物としてのケイスメントに付与しているように思われる。つまり、バルガス＝リョサは、さまざまな矛盾を抱えた人物としてのケイスメントを描きつつ、そうした矛盾によって決して一つの像に収斂しないフィクショナルな存在としてではなく、それらの矛盾を統合する、一人の、肉体を持った人間として彼を描いているのではないだろうか。

そのことが顕著になるのは、牢獄でのシェリフとの交流の場面だ。バルガス＝リョサは前述のインタビューで、ケイスメントの獄中での生活についてはほとんど記録が残っていないこと、つまり獄中の場面はほとんど全てが自身による創作であったことを明かしている^v。元来、相いれない対立する立場にある人物であったシェリフとケイスメントは、シェリフが息子の死についてケイスメントに語ることを通じて、立場を超えた友情を結ぶことになる。友情の証のようにしてシェリフがケイスメントにシャワーを浴びさせるのだが、シャワーに代表される水は、ケイスメントが内面で抱える矛盾ゆえの苦悩を取り去り、彼に肉体の感覚を取り戻させるものとして作中で度々描かれている^{vi}。このことが象徴しているように、ケイスメントとシェリフが友情を結ぶ際に、そこにあるのは、矛盾する諸々のレッテルを剥ぎ取った後に残る、一人の生身の人間としてのケイスメントの姿である。このように、バルガス＝リョサは、ケイスメントが併せ持つ矛盾した多くの側面を描く一方で、シェリフとケイスメントの立場を超えた友情というフィクショナルな挿話によって、逆説的に、一人の実在感のある存在としてのケイスメントの姿を提示している。端的に言って、こうしたケイスメントの姿は、バルガス＝リョサの初期の作品群で描かれる登場人物たちと比べて、読者にとり、「実在の人物」として共感することが容易い人物像となっているだろう。

バルガス・リョサによる、実在の人物としてのケイスメントに対するフィクショナルな操作として、さらに注目しておきたいのは、ケイスメントの同性愛に関する解釈についてである。『ブラック・ダイアリー』での記述について、『ケルト人の夢』のエピローグでバルガス＝リョサは、「私自身の印象――小説家のそれであることは言うまでもない――からすると、ロジャー・ケイスメントは有名なダイアリーを書き記したが、それを経験したわけではないし、少なくとも全てを経験してはいない、そこには多くの誇張やフィクションが含まれている、彼が書いたある種のことは、それを生きたかったが、実際にはできなかったことなのだ^{vii}」と書いている。この判断自体の是非は置いておくとして、ここで興味深いのは、ここでの判断が、「一小説家の」印象によるものだとバルガス＝リョサが言う時に、そこにはケイスメントに対する、小説家としての共感が感じられる点である。生きたかったが、実際には生きられなかった現実を、空想のなかで束の間だけでも生きることが可能にするものとしてのフィクションの役割について、バルガス＝リョサは度々述べている^{viii}。

こうした「小説家としての」バルガス＝リョサのケイスメントへの共感を踏まえると、作中

でのケイスマントは、バルガス＝リョサ自身の姿を反転させた鏡像であるようにも思われる。小説家であるバルガス＝リョサと対照的に、現実社会での大義のためにケイスマントは小説家たりえず、そのことによって現実において挫折あるいは敗北せざるを得ない人物だ。アマゾンにおいて聞き取り調査を行い、何が真実であるのか苦悩するケイスマントの姿は、アマゾンへの文化人類学調査に同行し、その際に伝え聞いた話から発想を膨らませることで、いくつかの小説へと発展させたバルガス＝リョサ自身を彷彿とさせつつも、極めて対照的である。

このように、『ケルト人の夢』という小説は、フィクション/現実という二項対立において、歴史的事実および、作者であるバルガス＝リョサの存在(ここでの作者は、いったん完成した虚構世界に一切関与しないどころか、上述したケイスマントへのバルガス＝リョサの共感や、本作のエピローグが端的に示している様に、虚構世界に積極的に関与する)によって、二重に現実へと紐づけられている。

しかし、それでもなお、本作には現実から乖離したものとしてのフィクション世界への回路のようなものが、いくつか開かれている。より正確言うならば、歴史的事実および、バルガス＝リョサという作者の存在という「現実」と、バルガス＝リョサ自身がこれまでに作り上げてきたものを含めた「フィクション」世界との狭間にある「夢」のようなものとしての虚構世界を、本作には見出すことができるのではないだろうか。例えば、本作では、ケイスマントがコンゴで親交を結び、語り合った人物としてコンラッドが登場し、『闇の奥』への言及がなされる。また、アラナ商会の没落ののちに寂れてしまったイキトスの娼館の描写は、ペルーの「ゴム・ブーム」終焉後の時代を主な舞台とした、バルガス＝リョサ自身の『緑の家』に登場する娼館「緑の家」を彷彿とさせる^{ix}。また、『緑の家』で、ゴムの密猟人フシーアのかつてのボスとして登場するフリオ・レアテギは、本作にも登場するフリオ・アラナをモデルとしているのではないかという指摘もあるようだ^x。

つまり、『ケルト人の夢』では、現実/フィクションという二項対立において、後者の前者に対する敗北が大筋では描かれながらも、現実とフィクションとの狭間にある「夢」のようなものとして、間テクスト的に広がる他のフィクション世界への回路との繋がりが細部に描きこまれている。こうした細部は、ケイスマントをめぐるスケールの大きな物語としての『ケルト人の夢』とは別様な、同作の魅力である。『ケルト人の夢』における、現実から自律したフィクション世界としての「全体小説」への志向は、むしろ、これらの細部に窺われているのではないだろうか。

【文献一覧】

- Anderson, Mark D.. “Dissonant Worlds: Mario Vargas Llosa and the Aesthetics of the Total Novel”,
in *Mario Vargas Llosa (Critical Insights)*, edited by Juan E. De Castro, Salem Press, 2014,
pp.201-218. (「虚構世界と実在世界との不調和な関係：マリオ・バルガス＝リョサと全体小説の美学」井上隆史訳、『白百合女子大学研究紀要』51号、2015年、71-95頁)
- Figueroa Amaral, Esperanza. “La casa verde de Mario Vargas Llosa”, *Revista Iberoamericana*, núm.
65, enero-abril de 1968, pp. 109-115.
- Kristal, Efraín. “From utopia to reconciliation; *The Way to Paradise, The Bad Girl and The Dream of the Celt*”, *The Cambridge Companion to Mario Vargas Llosa*, edited by Efraín Kristal and
John King, Cambridge UP, 2012, pp. 129-147.
- Kristal, Efraín and John King with Mario Vargas Llosa. “An Interview”, *The Cambridge Companion
to Mario Vargas Llosa*, edited by Efraín Kristal and John King, Cambridge UP, 2012, pp.
212-220.
- バルガス＝リョサ(ジョサ)、マリオ『嘘から出たまこと』寺尾隆吉訳、現代企画室、2009年。
---、『ケルト人の夢』野谷文昭訳、岩波書店、2020年。

ⁱ Efraín Kristal, “From utopia to reconciliation; *The Way to Paradise, The Bad Girl and The Dream of the Celt*”,
The Cambridge Companion to Mario Vargas Llosa, edited by Efraín Kristal and John King, Cambridge UP, 2012,
p. 129.

ⁱⁱ このようなものとしての小説への志向を端的に示すものとして、例えば次の様な記述がある。「概して小説作品が至高の存在たるためには、独自の法則や時間はもちろん、他の世界には見られない神話性や特質を備えることで周りの世界から独立し、別種の現実として読者に受け入れられねばならない。(…)現実をありのままに再現するのは出来損ないの物語だけで、真の小説は現実を打ち消し、作り直す。」(マリオ・バルガス＝ジョサ『嘘から出たまこと』寺尾隆吉訳、現代企画室、2009年、73頁)

ⁱⁱⁱ Mark D. Anderson, “Dissonant Worlds: Mario Vargas Llosa and the Aesthetics of the Total Novel”, in *Mario Vargas Llosa (Critical Insights)*, edited by Juan E. De Castro, Salem Press, 2014, pp.201-218. 引用は、同論文の日本語訳、マーク・D・アンダーソン「虚構世界と実在世界との不調和な関係：マリオ・バルガス＝リョサと全体小説の美学」井上隆史訳、『白百合女子大学研究紀要』51号、2015年、75頁から行った。

^{iv} Efraín Kristal and John King with Mario Vargas Llosa, “An Interview”, *The Cambridge Companion to Mario Vargas Llosa*, edited by Efraín Kristal and John King, Cambridge UP, 2012, p. 213.

^v 同上。

^{vi} 例えば、シェリフが規則を破り、初めてケイスメントにシャワーを浴びさせる際の次の様な描写。「目を閉じ、壁にかかったゴム製の箱の一つから取り出した石鹸を使う前に、腕と脚をなでさすりながら、冷水が体を伝って流れ落ちるのを感じる。彼は気分が高揚し、満足感に包まれる。この水の流れによって、何日もが過ぎる間に溜まった垢だけでなく、不安や苦悩、後悔の念も一緒に消え去る。」(マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』野谷文昭訳、岩波書店、2020年、195頁)

^{vii} 同上、p. 506。

^{viii} 「文学が人生の不満を和らげるのはあくまで一時的にすぎないが、それでも文学幻想が作り出す生活の一時停止、その奇跡の瞬間に我々は歴史的時間軸を離れ、無時間的永遠という祖国の市民に生まれ変わる。そして、実生活のお決まりの日課より強烈に、複雑に、幸福に、明晰に別人生を生きる。」(マリオ・バルガス＝ジョサ『嘘から出たまこと』寺尾隆吉訳、現代企画室、2009年、p. 377)

^{ix} バルガス＝リョサ、前掲書、2020年、pp. 374-375。

^x Esperanza Figueroa Amaral, “La casa verde de Mario Vargas Llosa”, *Revista Iberoamericana*, núm. 65, enero-abril de 1968, p. 113.

私はバルガス＝リョサとソ連・ロシアというテーマでお話ししたいと思います。内容は大きく三つに分け、はじめにリョサとソ連の関係について、次にリョサとロシア文学の接点についてお話しし、最後に『ケルト人の夢』の翻訳者を紹介したうえで、ソ連・ロシアにおけるラテンアメリカ文学の翻訳について彼がインタビュー等で語っていることを紹介するという形で進めます。

初めに、リョサとソ連・ロシアの関係について、リョサがソ連を訪問したときのことを中心に見ていきたいと思います。リョサはこれまで3度ロシアを訪れていますが、一度目の訪問はソ連時代の1968年、リョサがまだ32歳の時のことです。このときリョサがモスクワに滞在したのは実質たったの5日間で、当時の海外作家の公式訪問としては異例の短さでした。リョサの訪問に先立つ1965年、ソ連ではすでに『都会と犬ども』のロシア語訳が出版されており、大変な人気となっていました。のち1986年には、この小説をもとにした映画『ジャガー』（ロシア語原題：Ягуар）ⁱも制作されます。

ソ連の作家同盟から招かれる形でモスクワを訪れることになったリョサですが、実はこの数年前から、リョサとソ連の間にはいくつか複雑な問題がありました。一つは検閲の問題です。リョサはかねてよりソ連の検閲体制を強く批判し、作家シニャフスキーやソルジェニーツィンらに対する当局の不当な仕打ちを非難していました。そしてあるとき、リョサ自身もソ連の検閲に直面することになります。というのは、『都会と犬ども』のテキストのおよそ40ページ分が、内容的にモラルに反するとして翻訳の際に削除されていたことが判明したのです。作家が書いたテキストに対するいかなる改変・削除も許さないというのが基本姿勢であったリョサにとって、これは許しがたいことであり、ソ連の出版社に対し出版を取りやめるよう要請したほどでしたが、結局この要請は受け入れられなかったようです。

もう一つの問題は、ベストセラーとなった『都会と犬ども』の原稿料が未払いのままになっていたということです。実は当時、原稿料の支払いがなされないことについては、リョサ以外の海外作家たちも度々苦言を呈していました。結局リョサが正当な額を受け取ることができたのか、ロシア側では不明のままとなっているようです。

五日間のモスクワ滞在中、リョサは出版社・書店・美術館などを訪問したり、劇やサーカスを鑑賞するなどして過ごしましたが、そこからリョサがどんな印象を得たのかは、何とも言い難いところのようです。検閲や原稿料の問題がわだかまりとして残ったのみならず、のちの回想でリョサ自身が述べているところによると、キューバやソ連などを実際に訪問した経験も、社会主義・マルクス主義への失望につながったというのです。ただ、より決定的にリョサを落胆させたのは、リョサのソ連訪問から三か月後の8月に起きた、ソ連軍によるプラハ軍事侵攻であったようだ、とする研究者もいるようですⁱⁱ。

続いて、リョサとロシア文学の接点についても少し紹介します。リョサは19世紀ロシア文学、なかでもレフ・トルストイを自分にとって重要な作家として位置づけています。自らが理想とする「全体小説」の模範的なあり方をトルストイに見いだしていて、とりわけ『戦争と平和』を非常に高く評価しています。そして2017年には、トルストイに因んで設けられたロシア

の文学賞「ヤースナヤ・ポリャーナ賞」の外国文学部門に、リョサの『つつましい英雄』が選ばれます。受賞に伴いモスクワを訪問した際のインタビューから、リョサがロシア文学について語っている部分を抜粋したものがレジュメに掲載されているので、そちらもご覧いただければと思います。ところで、『つつましい英雄』の主人公たちについて、リョサは「社会を向上させているのは歴史で学ぶ英雄ではなくて、つつしみを知る英雄である彼らなのである。彼らこそが国の真の道徳を築き上げる隠れた力なのだ」ⁱⁱⁱと述べています。ロシアではたびたび言われていることですが、『つつましい英雄』のこのような主人公像は、19世紀以来ロシア文学の伝統において重要な役割を果たしてきた「小さき人」と呼ばれるプロトタイプに重なります。ロシア文学でいう「小さき人」とは、社会的地位が高くなく、とくに目立った才能ももたない、どこにでもいるような平凡な人間のことです。ロマン主義的な主人公に変わる、より現実に対応した新しいタイプの主人公像として、ゴーゴリをはじめ、ドストエフスキー、チェーホフ、クプリーンなど多くの作家の作品で描かれてきました。目立たないながらも社会の基盤となっているそうした人たちへのまなざしも、19世紀のロシア文学とリョサを近づけている要素といえるかもしれません。

トルストイ以外のロシアの作家では、ドストエフスキーやブルガーコフもリョサに影響を与えたようです。ブルガーコフの代表作『巨匠とマルガリータ』では、現代のモスクワに突如悪魔やキリストが現れ、時空を突き破る壮大なスケールで物語が展開しますが、リョサはここにラテンアメリカのマジックリアリズムに近いものをみえています。とはいえ、リョサにとってはやはりトルストイこそが師と呼べる存在であるようです。

では、ここから翻訳の話に移ります。『ケルト人の夢』のロシア語版は早くも2012年に出ています。ロシア語の表題は“Сон кельта”となっているのですが、面白いのは、ここで用いられている「夢」にあたる“сон”という言葉が、純粋に「眠り」に関わる言葉であるという点です。日本語や英語、スペイン語とは異なり、眠っているときに見る「夢」と、「志」「あこがれ」のような意味での「夢」はまったく別の単語であるため、この言葉が持つ二義性・曖昧さははじめから排除されていることになります。ちなみに、出版社による公式な紹介文の最初の一文も「『ケルト人の夢』—これは、独房で死刑を待つ主人公の眼前に現れてくる記憶のモザイクである」となっていて、やはり「眠っているときに見る夢」というニュアンスが強いように思われます。実際、小説の中でロジャーが何度も見る「夢」の部分は非常に印象的で、物語を進めるうえで重要な役割を担っているには違いありません。ただ、小説のなかに例えばこういう一節があります。「たとえわずか七日というあまり短い間にすぎなかったとしても、『ケルト人の夢』は実現した」。このような文脈では、眠りに関する「夢」として解釈するのは困難で、やはり「夢」という語が持つ多義性が前提になっていると思います。翻訳の際こういう問題にどのように対処したのか、興味深いところではあるのですが、今回は残念ながら紙の書籍を手に入れることができませんでした。実はネット上に後述のbogdanofsky訳とされるロシア語テキストのPDFは存在するのですが、ところどころ割愛されている部分があり、正式なものなのかどうか確認が取れなかったため、この点はまた改めて確認できればと思っています。

さて、『ケルト人の夢』を訳したのは、リョサへの造詣が深いことで知られ、ラテンアメリカ文学の名訳者としてソ連時代から活躍するアレクサンドル・bogdanofskyという人です。彼はもともとポルトガル語の演劇・文学を専門としていましたが、リョサの『世界終末戦争』を端緒としてスペイン語文学の翻訳にも携わるようになり、リョサの作品では他に『ラ・カテドラルでの対話』などを訳しています。文芸誌へのインタビュー等から、彼にとってリョサは、

ラテンアメリカの作家のなかでも特別な思い入れのある作家であることがうかがえます。

レジュメには参考資料として、彼のインタビューから抜粋したものを載せてありますので、ぜひお読みいただければと思います。『ケルト人の夢』に直接言及しているものは見つけれなかったのですが、それと関係のある事項としては、性的な描写の翻訳についてボグダノフスキーが述べていることは興味深く感じます。たとえば性行為の描写が淡々と続いているような場面をロシア語に訳す際、そういうものに適した語彙がロシア語には欠けているため、放送禁止用語や下品な俗語か、さもなくば堅苦しい解剖学的用語という両極端から選び取らざるを得ない、ということを彼は言っています。

それから、ソ連時代にはここにももちろん検閲が関わってきます。「ソ連にセックスはない」という冗談めいたフレーズがしばしば引用されるように、この時代、性愛をおおびらに描き出すことはタブーであり、同性愛などもってのほかでした。とはいえラテンアメリカ文学は多少大目に見られていたのではないかとボグダノフスキーは言っていますが、例えば『ケルト人の夢』のロジャーの日記などは、ソ連時代であればそのままそっくり翻訳するのは難しかったのではないかと思います。

性的な描写以上に厳しい制約を受けていたのは、政治関連の話題です。ボグダノフスキーはしばしば、「トイレの壁にトロツキーの肖像画がかかっていた」という描写すら却下された、というエピソードを語っていますが、いずれにしろ検閲にひっかかるより前に、編集者や翻訳者が憂慮し削除してしまうことが多かったようです。性愛と政治の話題が制限されるとなると、ラテンアメリカ文学の紹介という点ではかなりやりづらい状況だったのではないかと想像されます。ちなみに、他の国々に続いてソ連でも 1970 年代からラテンアメリカ文学ブームが起こりますが、とりわけ人気だったのはボルヘス、ガルシア＝マルケス、コルタサルあたりだったようです。

以上、バルガス＝リョサおよびラテンアメリカ文学とソ連・ロシアの関係を、いくつかの観点から概観してみました。雑駁な内容となりましたが、発表を終わります。

【参考資料】

Буйнова К.Р. Марио Варгас Льюса в Советском Союзе: К 85-летию писателя//Латинская Америка, № 7/2021. С.83-93

https://tula.aif.ru/culture/person/zhivoy_klassik_mario_vargas_losa_-_o_vozvrashchenii_geroev_i_vole_pisatelya (2022.6.10 最終閲覧)

<https://www.m24.ru/articles/literatura/16072015/78908> (2022.6.21.最終閲覧)

http://old.russ.ru/krug/20030403_kalash-pr.html (2022.6.21.最終閲覧)

<https://otr-online.ru/programmy/figura-rechi/aleksandr-bogdanovskii-22836.html> (2022.5.27.最終閲覧)

【後注】

ⁱ 1970 年代より長年ソ連で活動したチリの映画監督セバスチャン・アラルコンにより、モスフィルムで制作された。

ⁱⁱ Буйнова К.Р. Марио Варгас Льюса в Советском Союзе: К 85-летию писателя//Латинская Америка, № 7/2021. С.83-93

ⁱⁱⁱ 訳文は田村さと子訳『つつましい英雄』（河出書房新社、2015 年）あとがきより引用。

バルガス＝リョサとソ連・ロシア

バルガス＝リョサのソ連訪問¹

・1968年5月25～30日、モスクワ滞在。当時、海外の著名作家が作家同盟を通じてソ連に招かれる際は2週間の滞在が慣例だったが、リョサは実質わずか5日の滞在だった²。

・リョサの滞在については、通訳をつとめたT.ズロチェフスカヤの記録が残っているが、いまだ不明な点も多い。

・ソ連の作家・文学者の著作を入手すべく、いくつかの書店を訪れる。英語その他の欧米諸語に訳された面白い著作があまりにも少ないことに驚く。

〈スケジュール〉 ※ズロチェフスカヤの記録による。

25日 ソ連到着。モスクワ散策、ソ連作家同盟と食事会。

26日 クレムリン、レーニン廟、美術館など訪問。サーカス鑑賞。

27日 出版社「若き親衛隊」訪問。『都会と犬ども』³の原稿料を受け取る(?)。トルストイ博物館訪問。詩人エフトゥシェンコらと会合。

28日 海外文学を扱う書店を訪問。『シンデレラ』の劇を鑑賞。チリ大使館にて晚餐会。

29日 ゴーリキー文学博物館、海外文学図書館を訪問。エルモローワ劇場にて、ブルガーコフの『逃亡』を鑑賞。

30日 イギリスへ出発。

・ソ連との確執(?)

①原稿料をめぐる

・50－60年代のソ連では、海外の作家に対し原稿料の支払いが然るべく行われないことが多々あり、作家たちから不満の声が上がっていた。リョサの『都会と犬ども』に対しても支払いがなく、ソ連訪問前にもリョサは度々問い合わせていたが、ソ連側は原稿料を送ったと

¹ リョサの訪ソについての部分は、*Буйнова К.Р. Марио Варгас Льюса в Советском Союзе: К 85-летию писателя//Латинская Америка, № 7/2021. С.83-93* を参照した。

² 長期滞在が叶わなかった明確な理由是不明だが、作家同盟側とリョサとの間で滞在について手紙のやり取りがなされた際に、たびたび手紙がうまく届かず、招待が遅れたことが一因と言われる。

³ ロシア語版は1965年にモスクワの「若き親衛隊」社で出版された。この作品はソ連で大ヒットし、11万5000部という出版部数を記録した（当時のソ連の平均的な本の出版部数は3000部。また、ペルーやスペインでの出版部数と比較しても、ソ連における部数は驚異的なものといえる）。

主張。ズロチェフスカヤの記録では、訪ソの際に出版社で受け取ったことになっているが、真相は不明。

②検閲

・1966年に、作家 A.シニャフスキーと Y.ダニエルが不当に逮捕された事件に対し、リョサはソ連当局を批判。1967年にはソ連の検閲を糾弾し、ソルジェニーツィンを擁護。検閲やそれにとまなうテキストの削除に対して、リョサは断固反対の立場を貫いた。

・『都会と犬ども』ロシア語訳では、約40ページが「モラルに反する」として削除されていた。リョサは出版を取りやめるよう要請したが、聞き入れられず。

・1968年8月、ソ連軍によるプラハ侵攻。リョサにとっては大きなショックとなる。1968年11月の手紙を最後に、リョサとソ連作家同盟との間でコンタクトが途絶える。

リョサとロシア文学

・19世紀ロシア文学、とくにトルストイを好む。『戦争と平和』に「全体小説」のモデルを見出す。

・2017年、『つつましい英雄』でヤースナヤ・ポリャーナ賞⁴受賞。

・トルストイ・ロシア文学について：

「自分は多かれ少なかれトルストイの教え子だと思っていて、彼の世界は私に近いと感じます。概して、19世紀ロシア文学を読んだ経験は私にとって決定的な意味を持ちました。私の意見では、ロシア文学の散文作品は、その時代におけるもっとも豊かで輝かしいものです。ロシアの作家たちは、現実と拮抗しうる文学作品、つまり私が「全体小説」と呼ぶところのものを作り上げました。まさにこれこそが、私が取り組みたいと思っている文学なのです。

ロシアの作家の作品は、だいたいフランス語訳か英語訳で読みました。もちろんスペイン語がダメだからというわけではありません。それぞれの作品と翻訳によるでしょう。たとえばドストエフスキーの場合、スペイン語訳がすばらしい出来だったので、スペイン語で読みました。『戦争と平和』はフランス語で読んだのですが、それはこの翻訳が出た時、天才的な訳だと世界中で評判になっていたからです。実際私も同意見で、まるで原典で読んだかのような感覚を味わいました。

ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』を読んだのは1960年代で、当時この小説は英語に訳され、アメリカとイギリスで大ヒットしていました。この小説との出会いは、私にとって大きな衝撃でした。ブルガーコフは古代の神話的エピソードをとってきて、それを平凡な

⁴ モスクワから200キロほど南に位置する町で、トルストイの生地。現在はトルストイの家博物館が建っている。彼に因んだ文学賞「ヤースナヤ・ポリャーナ賞」は、2015年より外国文学部門が設けられ、著者ととともに翻訳者の仕事を評価することも目的とされている。ちなみにリョサ以前の受賞者は2015年がルース・オゼキ（アメリカ）、2016年がオルハン・パムク（トルコ）と、いずれもトルストイを敬愛する作家の受賞が続いている。

日常と混ぜ合わせてしまう—そこに立ち上がってくるのは、まさにラテンアメリカ文学の、マジックリアリズムの精神と非常に近い、現実と非現実の混合物です。しかし、繰り返し言いますが、なんといってもまずトルストイです。彼の「全体小説」の手法こそが私にとって重要なのです。」

(“Аргументы и Факты” № 43.のインタビュー

https://tula.aif.ru/culture/person/zhivoy_klassik_mario_vargas_losa_-_o_vozvrashchenii_geroev_i_vole_pisatelya
[2022年6月10日最終閲覧]より。)

ラテンアメリカ文学のロシア語翻訳

『ケルト人の夢』の翻訳は、2012年 Иностранка 社より出版される。ロシア語でのタイトルは“Сон кельта”。ちなみにロシア語で「夢」にあたる語“сон”は、「眠り」にのみ関する語であり、日本語の「夢」、英語の“dream”のような二義性は持たない。

・訳者 A. ボグダノフスキー (1952-) について

ポルトガル語・スペイン語文学の訳者。レニングラード大学文学部卒業後、ロシア国立舞台芸術アカデミーの大学院でポルトガル演劇を専攻したが、じき学問の世界から離れ、翻訳・通訳に専念。もとはポルトガル語演劇・文学を専門としていたが、リョサの『世界終末戦争』を契機にスペイン語の翻訳にも取り組むようになる。

これまでリョサの他、ジョルジュ・アマード、ジョセ・サラマーゴ、パウロ・コエリョらの作品を訳している。

資料：訳者ボグダノフスキーのインタビューから

① ソ連におけるラテンアメリカ文学と、その翻訳について

—ソ連で翻訳に携わっていたなかで、検閲に直面したことはありましたか。

—もちろんあります。検閲までいかないうちに、編集者たちが早い段階であぶり出していましたね。たとえば、トロツキーの名を出すことはできませんでした。化粧室の壁に彼の肖像がかけられていた、というのすらダメです。それから同性愛は厳禁でした。直接話法の中ならまだしも、それ以上は許されません。概して性的な場面は厳しくチェックされていました。といっても、政治や人名ほどではありませんが。

ラテンアメリカの人たちには免罪符があったような気がします—「これが私たちなんだ、他の人たちよりもセックスを沢山する権利があるのだ」とでもいうような。ジョルジュ・アマードの本なんて、いたるところ熱情、興奮、数多のムラートの娘たち、揺れる尻……実際これら抜きでは成り立たないし、墨で消してしまうことは不可能ですから。とはいえ、ソ連の基準からあまりにも大きくはみ出している場合は、削除されることもありました。

卑猥なものごとや、性的、ポルノ的なものをどう伝達するかというのは、重要なところです。ロシア語でそれらに適した表現をどうやって見つけたらよいのか、見当もつきません。教科

書の解剖学的用語か、でなければ放送禁止用語や下品な大衆語、このどちらかになってしまう。中間が無いのです。俗っぽく騒がしいやり取りに終始するようなケースはとてもやりやすいのですが、ただ淡々と性行為が描写されていくような場面—騎士道恋愛的な調子でもなければ、大衆的俗っぽさもない、機械的な愛撫が続くような場面となると、難しくなります。

一つまり、ロシア語には何かが足りないということでしょうか。

—残念ながら、そういうことです。でも私たちの言語はとんでもなく豊かで、まるで枯れることのない井戸のようです。こういったものを伝達するために何かしら材料を見つけることはできます。こんなエピソードが思い出されます。あるテキストに「夜明けに吠え出した狼たちか、あるいは飢えた愛人たちか」という箇所があったのですが、編集者たちは瞬時に、これはまずいとばかりに「飢えた愛人たち」を却下しました。何がいけないのかはよくわかりません。このあたりのことは、すべて微妙で曖昧だったので。まあ、「性器に言及してはいけない」ということだったとでもしましょう。これは絶対ダメだと。然るに「飢えた愛人たち」もダメということですから—何故かは知りませんが。私は問うことはせず、ただゲームのルールを受け入れました。

その後、ツヴェターエワの「重荷が大きいほど姿勢は美しくなる」という言葉の何と巧みだったことかと思い知りました。抑圧が強ければ強いほど、そこから飛び出す勢いが生まれ、結果として良いものができる。これもダメ、あれもダメ、あっちもダメ、何もかもダメ……と見えて、実はなんでも可能で、ただちょっとうまくすり抜ける必要があるだけだということです。ダメ、ダメ、ダメ……という厳しい枠組みに閉じ込められることは、翻訳者や文学者にとって良い鍛錬になります。残せる部分はすべて残しつつも「うまくすり抜ける」というこの能力を記念して、ソ連当局に捧げた碑を建てなくてはなりませんね。いや、記念碑は二つかな—一つ目はまず、アフマートワ、パステルナーク、マンデリシュタム、その他大勢の偉大な人たちに自由を与えなかったという業績に対して。それで彼らが翻訳に取り組むようになったおかげで、シェイクスピア、『ファウスト』、『マリオン・ドロルム』、バルビエなどを私たちは手にできるわけです。もし彼らが自由に活動できていたら、自分の作品に専念したはずですから、これらの翻訳が生まれることはなかったでしょう。なんだかんだ私たちは、シェイクスピアの五大悲劇をパステルナークの訳で読めるのです。かつてアフマートワは言いました—「詩人にとって詩を訳すことは、自分の脳を食べるようなものだ（発表者注：「非常に骨の折れる仕事だ」ということ）」と。彼らは大変だったけれど、私たちにとっては幸運だったね、というわけです。

（中略）

—ロシアでは、リョサよりもガルシア＝マルケスやコルタサルのほうがよく知られています。リョサは不当にも忘れられているようです。とはいえ最近では状況が良くなってきていて、ノーベル賞受賞以降は再版もされるようになりましたが。

—リョサにも一定数の読者はいるのですが、あまり売れないのです。ガルシア＝マルケスについていえば、私はそれほど好きではありません。あまり私の心に響かないのです。例外は『百年の孤独』で、これは当時もう強烈に面白くて、別の人生への扉みたいなものでした。決定的に新しかったんです。煌めき、騒々しさ、怒り、鮮明さ、エロス、軽快かつ陽気な、沸き立つ

ような生—この点でとくに感謝したいのはアマードですね。きわめて凡庸な翻訳だったとはいえ、こうしたものが1960年代にどっと流れ込んできて。この熱情、熱気、灼けつくような暑さが、寒々しい気候のもとにくらすロシア人にはひとしおでした。

—この文学（＝ラテンアメリカ文学）が身近に感じられるのは、ラテンアメリカが私たちの国に似ているということも理由の一つだとは思いませんか？ 政治的危機だとか、独裁体制だとか。リョサもかなり政治が絡んでいますよね。彼が書いていることは、私たちの過去そして現在に投影できます。

—大いにそうでしょうね。ですが、やや時代錯誤的かもしれません。というのもラテンアメリカ文学が現れた60-70年代、こちらの生活はなんだかんだ言って無味乾燥で整然としていて、党大会ばかりの地味なものだったのですから。そこへ突如、本の中では全く別の類の熱情が猛り狂う—発砲、恋愛、灼熱。行列、禁止令、党委員会……そんなおそまつな現実、退屈な生活から、どれほどかけ離れたものだったことか。私たちはまさにおとぎ話としてこれらを読んでいたのだと思います。愉快的、あるいは魔法のような話ではないにしても、ともかくおとぎ話として。またもやエロスについていえば、こちらにはそんなものが存在しなかったわけですが、ラテンアメリカでは、もう穴という穴から飛沫をたてて迸っているんですね。加えて、流行というものもあります。まるで山火事か、あるいはチフスとか麻疹のように広まっていきました。現在ですらそうです。例えばパウロ・コエーリョ。マルケスやリョサほどの評価を与えるわけにはいかないでしょうが、あれほどの成功はちょっと考えさせられますね。

（Москва24 へのインタビュー <https://www.m24.ru/articles/literatura/16072015/78908> [2022.6.21.最終閲覧]）

② それぞれの作家のスタイルについて

—いまあなたにとって一番難しい作家はサラマーゴですか？

—ものすごく難しいです。ゲーム性、積極的な“共謀”が求められます。一方、才能の点では彼にまったく引けを取らないバルガス・リョサは、もっと楽です。手を広げて大洋の海水に浮かぶみたいに、あの力強い流れに身を任せればよいのですから。サラマーゴは統語の面で極めて独創的で、慣用句に齧りつき、イディオムを木っ端微塵にし、いわゆる定型表現なるものを自己流に作り変えてしまう。そしてそれが時に驚くべき効果を生みだすんです。私はサラマーゴの翻訳のために、言葉遊びを蓄えているほどです—ふとどこかで役に立つかもしれませんから。

（中略）

—翻訳は大変ですか？

—いや、とても面白いです。沢山の玉を使ってお手玉をするみたいなものですね。でも、繰り返しになりますが、順調なばかりではなく……ツヴェターエフはうまく言ったものです、「どうやって自分がこれを作り出したのか、ではなくて、どんなふうにこんなものができたんだろう

？と自問してしまう」と。自分にとって馴染みのないレアリア、中南米の儀式などが出てくると難しいです。こう言った人がいました—あらゆる間違いは、言語能力の不足ではなく、シチュエーションを理解できないことに起因すると。とあるニカラグアの民衆の遊びがどんなものか理解するのに、途方もなく苦労したことがあります。結局これは、目隠しをして竿で皿をたたき割るという、バシキールの遊びと似たようなものだということが分かりました。それから同じ小説の中で、主人公たちが三日間山地をさまよい歩き、その間「トルティーヤ」だけで食いつないでいたと書かれていました。これはトウモロコシでできた薄焼きパンなのですが、私はなんとこのとき、たぶん『ブラチーノの冒険』⁵を思い出しながら、「亀だけで食いつないでいた」と訳したんですよ。どういう風の吹き回しで山に亀が？！ 幸い、真相がわかりました。油断できませんね。あとはアマードの作品で、アフロブラジルの宗教儀式カンドンブレの描写があったのですが、とても難しかったです。

(中略)

—…たとえばリョサは、何よりもまず誠実さと、高いロシア語力が求められます。アマードをロシア語にするためには、ぐるっと裏返さなくてはならないし、サラマーゴは真の意味での“共同制作”を要します。

(Русский Журнал のインタビュー http://old.russ.ru/krug/20030403_kalash-pr.html [2022.6.21.最終閲覧])

—ラテンアメリカ、スペイン、ポルトガルの文学というと、おそらくまず意識に浮かんでくるのはラテンアメリカについては特にそうだと思いますが一色鮮やかで明るい世界という像です。翻訳という観点で、こうした世界がロシア語に移しかえられるにあたって何か近いもの、ヒントになるようなものはあるのでしょうか。ゴーゴリ流のメタファーなんかは、これに近いのでしょうか？

—驚かれるかもしれませんが、サラマーゴを翻訳するとき、ゴーゴリはすごく助けになるんですよ。というのも、ここでは素直な因果関係というものが通用しないからです。すでにさっき話したように、周りでセルヴァが荒れ狂い、雀サイズのゴキブリが這い回っていたとしても、ラテンアメリカ人はフランス風にエレガントに、すべてをよく吟味しながらフロベール流のやり方で書くかもしれません。そしてサラマーゴは、平穏で秩序ある国に住んでいながらも、あの怒涛のような比喩のフィオリトゥーラはまさにゴーゴリ流です。ゴーゴリは助けになります。

(Общественное Телевидение России のインタビュー <https://otr-online.ru/programmy/figura-rechi/aleksandr-bogdanovskii-22836.html> [2022.5.27.最終閲覧])

⁵ 1976年にソ連で制作された、テレビ放映用のミュージカル映画。「トルチッラ」という名の亀が登場する。

世界各地を転々としながら激動の生涯を送ったロジャー・ケイスメントの姿は、文学作品だけでなく、多くの映像・舞台作品においてもたびたび描かれてきた。1916年には彼の生前の様子を捉えた貴重な記録映像が米国人のカメラマンによって発表されているが、それ以降も、ドイツ、イギリス、ブラジルなどの各国で、ドキュメンタリーやフィクション映画、テレビドラマや演劇といった媒体でケイスメントの人生は再現されつづけてきた。本報告では、マリオ・バルガス＝リョサが『ケルト人の夢』で示した多面的なケイスメントの人物像を念頭に置きながら、異なる時期や地域で発表された映像・舞台作品におけるケイスメント像を検討する。それらの作品で彼がどのように表象され、そこにはどのような思惑や背景があったのかを明らかにしたい。

まずは、生前のケイスメント本人が映っている数少ない記録映像から見てみたいⁱ。この映像は1915年4月、ベルリンに滞在していたケイスメントを、アメリカ人ジャーナリスト、フランス・ヒューゴ・クレブス（Franz Hugo Krebs）と、カメラマンのアルバート・ドーソン（Albert K. Dawson）が撮影したものだ。クレブスは親ドイツ的な思想をもって当時ドイツに駐在していた人物で、ケイスメントと親交を結んでいた。ケイスメントが彼にアイルランド蜂起を阻止するための重要な手紙を託すほどの仲だったようである。カメラマンのドーソンは、ドイツからの資金的援助をうけてドイツのプロパガンダ的な映像を制作していたニューヨークの会社で働いていた。ケイスメントのロマンティックで魅力的な人柄に惹かれたクレブスは彼にカメラの前に出るよう頼んだ。あまり健康状態がよくなかったケイスメントは最初映画に出るのを渋っていたが、「これによってアイルランドへの援助が増えるのなら」と思っ出演を承諾した。この記録映像は1916年の5月、ケイスメントが獄中にいるとき、イースター蜂起のあとでこの反乱に世界的な関心が集まっているなか米国で放映されたⁱⁱ。映像を見ると、手紙を封筒に入れようとし、タバコを吸うケイスメントの姿が映っている。せわしない様子でカメラを意識しながら時々はにかんでいる彼の姿は少しやつれているが、どこかユーモラスでもあり、撮影者たちとの親交も伺える。当時の世界情勢を鑑みればプロパガンダ的な目的のもとに映像を位置付けることも可能だが、それだけでなくケイスメントの人となりをつめた貴重な記録であると言える。

次に、処刑から約50年後、彼の遺体がアイルランドのダブリンに運ばれ、国葬が行われたときの映像を見てみたいⁱⁱⁱ。『ケルト人の夢』のエピローグに書かれていたシーンである。これはパテ・ブリティッシュというイギリスのニュース映画会社が所蔵している映像だが、彼の遺体をおさめた棺が荘厳な儀礼をもってアイルランドで迎えられていたのがよくわかる。いかにケイスメントという人物がアイルランドというネーションにとって重要な人物であったか、そして彼の身体が国家的象徴としてどのように形成されていくのかを記録した映像である。

こうしていくつかの記録映像が残されている一方で、ケイスメントの波乱の生涯を劇映画にすることはなかなか難しかったようだ。1930年代には、米国のユニバーサルピクチャーズがケイスメントのフィクション映画の企画を立てていた。植民地の状況の告発や戦時中の各国を飛び交いながらの革命的行動、そして収監に処刑という数々の出来事に満ちた彼の人生は、ハリウッドのスペクタクル映画にとってうってつけの題材であったと言える。しかし、イギリスの

国営映画機関によって「英国では上映が許可されない」という検閲を示唆されたために、この映画が完成されることはなかった^{iv}。また『ブラック・ダイアリー』が示した彼の性生活も、単純に娯楽作として彼の生涯を扱うことをさまたげたのだらうと思われる。彼の人生は単純化を拒む複雑で多面的なものだった。

しかし、『ブラック・ダイアリー』がパリで出版され、その存在がより公になった1960年代にはテレビシリーズでケイスマントの姿が描かれるようになる。イギリスの独立系テレビ局が製作した『ロジャー・ケイスマント卿』(Sir Roger Casement)という番組は実際の裁判の様子を再現したドラマシリーズ(On Trial)のなかの一番組だが、ケイスマントの裁判の様子が忠実に劇映画として再現されている^v。この映画でケイスマントを演じているのは、この映画が制作される直前、1959年に作られた現存する英国最古のゲイをテーマにしたテレビドラマとされる『南』(South)で主役を演じたピーター・ウィングガード(Peter Wyngarde)だ。彼によって、ケイスマントは繊細でありつつ法廷で堂々と証言を述べる人物として再現されている。『ブラック・ダイアリー』に触れながらも、映画はケイスマントを貶めるのではなく、彼の感動的なスピーチを時間をかけて映し、彼の人道的活動を評価している。

また1968年に西ドイツで制作された90分×2回のテレビドラマ『ロジャー・ケイスマント卿』(Sir Roger Casement)では、『ブラック・ダイアリー』の記述を事実であるとしつつ、同性愛者としてのケイスマントが明確に描かれている^{vi}。当時のドイツではナチス時代からの反同性愛法案が温存されており、ゲイバーが警察の搜索をうけ、ゲイ男性が投獄されるような状況だった。そうした社会情勢のなかで、ゴールデンタイムに英雄的なゲイ男性がテレビで放送されることはひとつの事件だっただろう。

ここまで見てきてもわかるとおり、ケイスマントの人生を再現するうえで、『ブラック・ダイアリー』をどのように扱うかは最大の争点であった。映画や舞台の多くは、バルガス＝リョサが『ケルト人の夢』で取った姿勢と同じように、日記がケイスマント本人によって書かれたものであることを前提にしつつ、その内容が真実であるか、または妄想であるかについて、自由に表現している。『ブラック・ダイアリー』はケイスマントの人間性を掘り下げるために避けてはとおれない、現実と虚構が交差する書物だった。

ブラジルで2016年に上演された『ロジャー・ケイスマントの2つの死』(As Duas Morte de Roger Casement)という演劇は、この『ブラック・ダイアリー』から浮かびあがるケイスマントの人生の不確かさそのものを表現している。この演劇は、『ケルト人の夢』と似ていて、A面とB面という2部構成になっており、A面ではアリス・ミリガンというアイルランドの作家・活動家でケイスマントの独房を二度訪問した女性の視点から南米を訪れて以降のケイスマントの活動、つまり「プトゥマヨ・レポート」の調査と発表、その後のアイルランドでの闘争への参加、逮捕、処刑といった伝記的な部分が描かれる。ここでケイスマントの1度目の死が描かれるわけである。

一方B面では『ブラック・ダイアリー』というケイスマントの名誉に関わる書物が直接的に取り上げられる。『ブラック・ダイアリー』によってケイスマントの名誉は傷つけられ、いわば二度目の死を与えられたわけだが、この演劇の最も創造的な部分は、この日記に描かれた彼の過去もしくは欲望と、ケイスマント自身がいかに向き合うかを描いた箇所だろう。処刑後のケイスマントの遺骸がまず埋葬されたのはイギリスのペントンヴィルにある墓地だったが、彼の墓標の隣には自身の妻を殺害して処刑されたクリッペン博士が埋葬されていた。この演劇では1965年にペントンヴィルからダブリンへとケイスマントの遺骨が運ばれている飛行機の機内で、このクリッペン博士の亡霊とケイスマントの亡霊、そしてアリス・ミリガンが『ブラック・

ダイアリー』について対話する。クリッペン博士が日記を読み上げながら、舞台ではキャバレー的な雰囲気の中でかつてのケイスマントが演じられ（過去のケイスマントは別の俳優によって演じられる）、それを亡霊となったケイスマントが見つめている。ここではケイスマントが自らのセクシュアリティと対峙するさまが表されている^{vi}。この演劇では、歴史上の偉人としてのケイスマントの像を離れ、彼のより個人的な事柄について想像力を刺激するような方法で描かれているのである。

演劇では、ほかにも 2016 年にダブリンで上演された『帝国の悪夢／ヨーロッパの夢』(The Nightmare of Empire/The Dream of Europe) というやはり 2 部構成のモノローグ演劇で、ケイスマントの亡霊が 21 世紀の帝国主義、すなわちアップルやソニー、サムソンといった大企業をつくるハイテク製品のために鉱物を採取しつづけるアフリカの鉱夫について語っている。

ここまで駆け足で検討してきただけでも、ケイスマントが同時代や後の時代の人々の想像力を刺激し、多様な視覚表現を生み出すだけの多面性を備えた人物であったことがわかる。英国当局による規制や検閲の影響は大きかったが、それを超えて米国やドイツ、ブラジル、アイルランドにおいて、彼の人生は論争的な部分を含みながら時代や国境をこえて描かれてきた。近年では、その表現は記録性や伝記性をはなれて、より想像的な演出（たとえば亡霊として）を施されている。それはケイスマントが自身の身をもって提起した、植民地・帝国主義やセクシュアリティの問題が解決済みのものではなく、アクチュアルな課題として現在に張り付いているからだ。ロジャー・ケイスマントという人物のなかにある多面的な生の痕跡は、我々をつねに魅了し、光の当てられ方を変えながらこれからも再生されつづける。『ケルト人の夢』を含め、彼の姿が描かれた様々な作品は、過去の出来事や実在の人物の生涯を「正しく知る」ためだけでなく、要約しきれない複雑な一人の生をもとに私たちの世界を「想像する」ための機会を与えてくれるだろう。

ⁱ <https://www.youtube.com/watch?v=13xuJmtUR2I&t=11s>

ⁱⁱ 撮影の経緯については、Cooper C. Graham, Ron van Doppen (2016): “Roger Casement on Screen: The Background Story on an Historical Film Opportunity, 1915–1916,” *Historical Journal of Film, Radio and Television*, vol.36, pp.493-508. を参照した

ⁱⁱⁱ <https://www.youtube.com/watch?v=pCwFuURQqR4&list=WL&index=2>

^{iv} 以下の口頭発表の記録を参考にした。Jeffrey Dudgeon (2013), “Roger Casement: Controversies in Script and Image,” QUB School of Creative Arts, Room 101, 12 University Square, 22 April 2013.

^v <https://player.bfi.org.uk/free/film/watch-the-trial-of-sir-roger-casement-1960-online>

^{vi} このドラマは映像を確認できなかったため、内容については以下の論文を参照した。Fergal Lenehan (2019), “Propaganda, Literature and a Television Mini-Series: Representations of Roger Casement in Germany, 1916-2016,” *Estudios Irlandeses*, 13, pp. 55-68.

^{vii} 舞台の断片的な場面については、以下の映像に記録されている。

<https://www.youtube.com/watch?v=vk0xzELRpsI>

マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読む
ワークショップ成果報告集

2024 年 10 月 31 日発行

編 者 久野量一

発行者 東京外国語大学総合文化研究所

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

ISBN 978-4-907877-35-4